

『日本アジア研究』第8号(2011年3月)

## 娘から見た巫堂の世界 ——ある在日コリアン2世ハルモニの語り(上)——

金沙織\*・福岡安則\*\*・黒坂愛衣\*\*\*

朝鮮半島文化のシャーマンである巫堂(ムードン)を生業とした母親をもつ、ある在日コリアン2世の女性からの聞き取り。語り手のライフストーリーのうち、本稿では、娘の立場から見た「巫堂の世界」に焦点をあてる。

中村幸子さん(仮名)は、1935年大阪生まれ、聞き取り時点では日本国籍を取得している。母親は、遠方からも客が訪ねて来るほどの有名な巫堂だった。語り手は、子どものころから、乳飲み子の弟妹たちの子守り役として、頻繁に、母親の祭儀についてまわり、その仕事を間近に見てきた。また、母親に巫堂の力を与えた「神さん」の世界のありようや、祭儀の手続きがもつ意味、「神さん」と人間のあいだに立つ巫堂の役割などについて、語り手は、成育の過程で繰り返し、母親からの説明を聞いている。さらに、語り手自身、「神の使いが降りてきて造花がしゃべった」「息子の交通事故を母親が事前に教えてくれた」不思議の体験をしている。その意味で、母親だけでなく、語り手本人もまた、巫堂の世界観を生きてきた一人である。

本稿は、亡くなる時まで「巫堂」をまっとうした母親の姿を、まさに巫堂の世界観に基づいて伝える、娘による物語りである。数々の不思議の出来事が語られるが、語り手のストーリーテリングの能力は高く、ひとつひとつのエピソードの情景が、まるで昨日の出来事のように鮮やかだ。そのなかで、巫堂の「拝み」は、けっして人間の思いどおりに現実を動かすようなものではなく、あくまでも、「神さん」の声を聞き、「神さん」を怒らせている原因を取り除くことで、人間世界に起きている障りを小さくしようとするものとされる。母親から伝えられた知識や解釈が随所に散りばめられているこの物語りは、その受け手(聞き手/読者)がたとえ巫堂の世界観を共有していなくとも、その世界観を生きる人々がたしかにいる(いた)ことを、了解させる力をもっている。巫堂の世界観を伝える口頭伝承ともいえるだろう。

なお、「ある在日コリアン2世ハルモニの語り(下)」では、「帰化しても気持ちは朝鮮人」と題して、語り手自身の生の軌跡に焦点をあてて報告する予定である。

**キーワード:** 在日コリアン、巫堂、ライフストーリー

以下に、在日コリアン2世のハルモニ、中村幸子さんのライフストーリーを

\* キム・サジク、埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程1年、社会学。

\*\* ふくおか・やすのり、埼玉大学教養学部教授、社会学。

\*\*\* くらさか・あい、埼玉大学非常勤講師、社会学。

呈示する。彼女からの聞き取りは、複数回からなる。2009年9月17～18日と2010年5月20～21日には金沙織が聞き手となって、2010年8月11～12日には金沙織と福岡安則と黒坂愛衣が聞き手となって、姫路の語り手の自宅にて聞き取りをおこなった。とりあえず金沙織ほか「聞き手」となると述べたが、じっさいには、聞き取りの場面には、つねに、語り手の娘と孫が同席しており、わたしたちはむしろ、その場において耳を傾けることと録音することに集中していたと言ったほうがよいだろう。そのため、語り手の語りは、基本的に身内の者に語りかけるスタイルをとっており、とりわけそれが親族呼称に特徴的にあらわれている。たとえば、彼女は自分自身のことも「私」と言うよりも「おばあちゃん」と言うことのほうがはるかに多い点など。金沙織が語り手の孫と幼なじみであることが、身内以外の者が同席していても、そのような語りの特徴を壊さないとすんだのではないと思われる。

語りの内容面でいえば、初日の聞き取りでは語り手自身の生活史の口述が中心であったが、そのなかで「空襲の最中、神さんの力できょうだいの命が救われた」ことや「大阪の家で造花が話した」ことなど、「巫堂である母親」にまつわる語りが何度も登場した。そのため、2日目以降で、「娘から見た巫堂の世界」に焦点をあてて、語ってもらうことになった。本稿では、まず、このトピックをめぐる語りをまとめた。次稿で、語り手自身の生活史を中心にまとめる。

なお、語りをまとめるにあたっては、語り手本人の希望により、名前は仮名とした。同時に、語りのなかに出てくる人名・地名なども必要に応じて匿名化している。

語りを再現するにあたって、全体の流れを通しやすくするため、一部、語りに編集を加えている。〔 〕は、文意を明確にするための補足。また、語り手がどう発音したかを明示しつつ、意味を明確にするために、「日本語（ことば）」「差別（あれ）」「姫路（ここ）」といった表記法をしたところもある。さらに、「私（おばあちゃん）」と「母親（おばあちゃん）」といったかたちで、語り手自身と語り手の母親を弁別したり、「父（おじいちゃん）」「夫（おとうちゃん）」など、8ポの（ ）内にじっさいの発音を記述しつつ、登場人物の特定化を容易にする記載法を採用している。

\* \* \*

## 父母の渡日

14歳のお母さんと28歳の父（おじいちゃん）が韓国でな、式だけ挙げて、母（おばあちゃん）はまだ子どもやからそのまま里の家へ、「呼び寄せるから」言うて置いといて……。生活ができへんやん、連れてきたら。仕事がないし。そのままその足で、父親（おじいちゃん）ひとりだけで大阪へ来たわけや。

ほいで、母（おばあちゃん）は3年待ったんやな。やっとな父（おじいちゃん）は鋳物工場で職人として認められて〔母を日本に呼び寄せることができたンや〕。真面目に働いてしとうからな。朝鮮人いうたら、もう、ものすごい差別（あれ）されよったときやからな。でも、ついた親方がものすごいよかって、「嫁さん〔朝鮮に〕置いとンや」いうて言うたら、「社宅与えたるから嫁さん呼びよせ」いうて言うてくれた。そやから、父（おじいちゃん）はええ親方に当たったわけ

や。親方によってものすごい〔差があつて〕。炭鉱へ連れて行かれてな、ごっついことされて死んだ人もいっぱいおるんや。父親（おじいちゃん）、まあ運がよかつたんちがうか。最低、生活ができるぐらいのな、給料もられるようになって。親方の勧めで母（おばあちゃん）を呼び寄せたン、3年後な。母（おばあちゃん）は里で3年間待った。もう結婚した限りは、あの時分はどんなことがあつても、旦那が〔迎えに〕来るまで待つか、呼びよせたら来ないかん仕来り（あれ）やったからな。

ほんで、16のときに〔日本に来たンや〕。母（おばあちゃん）の言うのには、「なんにも持たんと自分の着替えだけ持って〔来た〕。暑いときやった」言いよつたわ。暑かつたから韓国の団扇1つ持って来たんが、大阪の駅やったンやて。ひとりで船乗って。そやから、ちゃんと父（おじいちゃん）が手紙で〔日本への来方の情報を〕送つとンや、費用と一緒に。——〔父は〕3年間働しようあいだに、父（おじいちゃん）の本家にもおカネずつと送りよつて。本家助けていかなあかんからな、昔の人は。

ほんで、〔母は〕船に乗って、父（おじいちゃん）が来たみたいにして博多へ着いて、大阪まで来て、大阪の駅降りたんやけど、もう日本語（ことば）知らへんやン。初めて、外国、日本の国というの踏んだやン。——それず一つと話ししよつたわ。——言葉は知らへんわ。頭はびち一つとして。あの、ピネ<sup>1</sup>な、して。そないして、もうほんまに、韓国人まるだしの恰好して、朝鮮の服、チョゴリとチマ着て、団扇1本持って、大阪の駅へな、なにもわからず立つとつたンやて。言葉しゃべられへんから。ポスンとな。「駅の前に立つとれ」いうな、手紙1個だけ持って。きよろきよろしとつたらな、むこうのほうから、背の高ーいな、ごっついな、おっきい人が来よつたンやて。見たらな、自分の旦那やったンや。父親（おじいちゃん）、ものすご背が高いし、体格がものすごええから。それで、父（おじいちゃん）とな、行ったところが大阪の社宅やったンや。

その社宅に入って生活して、そこで私の姉さん3人と兄さんと私と弟2人、産んで。大阪ではそんだけ。7人生まれたンや。

### 姫路へ疎開、闇の買出しで生活

〔大阪が〕空襲警報になつたンや。親戚の親戚、薄い親戚に聞いて、日本における知りあい聞いて探した〔疎開先〕が、いまの私（おばあちゃん）の実家や。どんなことしても〔大阪から〕出なあかんかつたンや。もうな、大阪が全体に空爆に入つとつたンや。疎開するのにな、箆箆とかあんなもみなほかしてきたやン。私らが10歳のときに、4月かなあ、枕を背負わされてな、兄ちゃんとふたりで線路の上歩いて〔姫路に〕来た記憶がある。

ここへ来たときは、闇で買出しせえへんかつたら、生活ができへんねや。で、父（おじいちゃん）も母（おばあちゃん）も、岡山の桃は和気（わけ）のほう、みかんは広島か和歌山やな。ほいで、九州かどっかのほうへ行って砂糖の買出しをして、こっちで売りよつたンや。砂糖みたいなもんは、私らの口に入らへんでな、よっぽどなんかこしらえるときしか。そんなンでもう、父（おじいちゃん）と母（おばあちゃん）は闇の買出しに必死や。終戦までは闇しよつたんや。買出しに行つて、買うて、背中におぶつて帰つて……。

<sup>1</sup> ピネとは、チマチョゴリを着る際に使われる伝統的な髪飾りのこと。

大阪におるときに、なにか知らん、神さんが来とったわけや、母親（おばあさん）若いとき。私ら子ども心によく知っとんや。造り花、チューリップとか、ポンと置いとったらな、そこからな、もの言うん。神さんが降りて来とったんや。神の使いというのが降りて来とったんや。その神さん連れて姫路（こっち）へ来たから。祀とったからな。ほんまに、母親（おばあさん）しか来てない、そんな神さんはな。その神さん、買出しに行くいうたら付いて行くやん。もう、駅、駅、憲兵がみなおるんや、その闇〔の〕買出しを捕まえるために。

あんとき資本もないし、子どもを育てるの〔大変やったんや〕。ほんで、下関まで買出しに行ったり〔した帰り〕、順番、順番に来るあいだな、〔汽車を〕乗り換えて来るやん。蟻ンこみたいに乘っとうでな、みな、昔の鈍行の〔汽車に〕。ほんならな、あとひと駅で〔降りる〕駅やいうときになったら、〔神さんが〕「あそこは警察が張ってしとうから、この駅で降りい。あそこの駅行ったら、みな取られる」というて言うてくれンねやて。その通りにしたら、ほんまなんや。ほんで、「この駅で降りて、1つ〔汽車を〕行かしたあと行け」と言うてくれンねやて。そういうふうにして切り抜けてな。——「お母ちゃん、〔警察に〕取られたことないん？」言うたら、「取られたことない」〔言うとった〕。

### 姫路大空襲に遭う

それで私らな、生活さしてくれよったときに、大空襲や。姫路大空襲。忘れもせえへん。田んぼにな、田植えしたときやから、5月か6月か<sup>2</sup>。そら、みな逃げなあかんねや。「さあ、空襲や」というて。

私ら、もう暗なって、子どもだけや。2番目の姉ちゃんやろ、3番目の姉さんやろ、兄ちゃん、私やろ、たかし、よしおや。子ども6人だけで。昔は、リヤカーというのがあったやん。家の裏に置いてあるからな。ほんなら、2番目の姉さんがな〔指揮をとって〕、3番目の姉さんにリヤカーに必需品〔載せて曳かせたんや〕。お母さんがおれへんかったら、姉ちゃんが世話（あれ）せないかん。きょうだい6人みな〔姉ちゃん〕1人〔では〕連れて行かれへん、逃げるのに。私は3番目の姉〔の、ひさ〕ちゃんと、兄ちゃんと、弟1人〔と一緒〕や。ほいで、2番目の姉ちゃんがやっぱり、リヤカーに荷物いっぱい載して、弟1人と荷物押して。「ひさちゃん、おまえはちゃんと手離さんと一緒に出て行くんやで！」言うて。

ほな、「空襲警報！」暗なって空襲警報やん。親がおれへんさかい、親頼りにできへんやん。私ら姉ちゃんに付いて行くだけや。「リヤカーから手を離すなよ！」言われて、リヤカー摺んで、ぞろぞろぞろぞろ行きよったんや。〔あたりは〕もう真っ暗（くろ）けや。暗なった思ったら、焼夷弾、落とすんや。B29がワーッと空から。そら綺麗で、ものすごい。焼夷弾いうのは落ちるとき、光パーッと照らして、そこ攻撃する。見たら、空から雨嵐のように、光ったやつがザーッと落ちてくるんや。土手あがったら、その土手のむこう、川があったやんか。ほんならな、姉ちゃんがな、「川のほうへ行かんと、荷物を土手の端っこ置いとって、みな、体を伏せー！」言う〔から、体を伏せて〕こないして見とったらな、ダーッと焼夷弾がごっつい音しよったわ。ものすごいで。もう、雨のように焼夷弾が落ちてくんねン。頭の上もバーッと落ちようやん。ほ

<sup>2</sup> 記録によれば、姫路大空襲は、1945（昭和20）年6月22日のことであった。

な、「いやー、綺麗！」いうて見とったら、「見たあかん！伏せとけー！」いうて。伏せとったら、むこうで「きゃー！」とか「痛いー！」とかいうて泣く声がすんねん。土手越して川縁（かわべり）の土手にみなな、掴まって伏せとうわけや。川のむこうはものすごい落とすんや。その流れ弾がな、あたった人が「痛いー！助けてー！」いうて、声が聞こえるわけや。——〔私らが無事やったこと〕それも神さんの知らせ〔のおかげ〕やな。

ほんで、夜が明けて、帰ってきよったら、焼け野原。なんにもない。びっくりしたのに、私らが住んどうまわりだけがな、焼けてへんねん。もう、私（おばあちゃん）の家からな、まる見えな。姫路城が見える。姫路城だけポツンや。

〔そのとき〕父（おじいさん）と母（おばあさん）は買出しに行つとんや。ほんならな、早よ帰って来られへんねん。空襲やいうて汽車が止まってもうたんや。「姫路大空襲で全部焼け野原になった」という放送が入って、行かれへんということ聞いてな、子どもらもうダメや思つたんやて。ほんならな、「心配するな。子どもは大丈夫や」というてな、〔神さんが〕言うてくれたんやて。ほんで、その日の夕方帰って来たんや。それも歩いて、ごつつい。「岡山の和気から歩いて帰ってきた」と言いよった。「ものすごいかかって、寝えへんと歩いてきた」と言いよったもん。

その空襲のあと、昼間は昼間でな、ものすごいビラを撒くんや、アメリカの飛行機が。ビラにな、「降伏せよ」と。「原爆を落とす」というて忠告したんやで、アメリカも。「降伏したら原爆落とせへんけど、降伏せえへんかったら原子爆弾落とすから」というて。もう、空からキラキラキラ、飛行機が通つたあと、そこらじゅう、ものすごいビラ（あれ）だらけやったんや。私ら、子ども心に喜んでそんな拾う（ひら）いに行ったわいな。紙拾うて来てやな、焚き火の燃やすあれに使うたけど。ものすごかったんやで。それでも降服せえへんかったんや。ほいで、原爆落とされたんや。ほいで8月15日な、終戦なつたんやんか。もう、私らみな、ラジオにしがみついとうやん、子どもでも。

### 先祖の霊が神さんになって降りてくる

お父さん〔の家〕はな、3代続いてな、〔男の子は〕1人ずつしかおりてけえへんねん。お父さんの上の上からな、ようけ男の子生まれるんやけど、みな早死になんや。もう、1人でおりてくる子孫やつたんやて。族譜（チョッポ）いうのを見たらな。お父さん〔も〕兄さんも弟もおるけども、早よ死んで、〔男の子は〕お父さんしかおれへん。そやから、3代遡つた、夫（おとうさん）の母親（おばあさん）の姑（おばあさん）の姑（おばあさん）が、自分の子孫が絶えるから、天へ昇って、神さんに「自分の子孫を助けてくれ」というてな、何十年かけてお祈りして降りてきた神さんなんや。ほんまの天の神が降りてきとんや。母親（おばあさん）の姑（おばあさん）の姑（おばあさん）〔の霊〕が、〔私の〕お母さんに〔降りて〕来たんや。みな、男の〔母親である〕姑やで。子孫〔を心配する〕いうたら、姑やん。〔家系を続かせるのは〕父系（おとうさん）の血やから、継嗣（おとうさん）と一緒になつた女（ひと）が順番順番に子ども産んで。女（しゅうとめ）は、もう結婚したら、その家守るんやでな。子ども産んで、男産んで。ずーっと、自分の子孫を守る。——「お母ちゃん、なんで神さん来たん？」いうたら、みんな教えてくれたんや。——自分の子孫を守るために、4代前の姑（おばあさ

ん) [の霊] が降りてきたんや、お母さん [に]。神さん受け入れられるような嫁 (ひと) を探すために来たンやけど、[何代も] ずーっとおれへんねや、そんな嫁 (ひと) が。ところが、たまたま、お母さんがあつたンや。神さん来てもええような人やいうことを、定められて、天からな、お母さんに来たわけなンや。ほいで、降りてくるのに、行ったり来たりできる使いのもの、天使みたいなんがおらへんかったらあかんのンや。神さんの命令をお母さんに教える人。——それをな、もう懇々と教えてくれた。

いちばん最初 [に生まれた] 女の子、死んだンや。ものすごいかわいらしかった女の子。私 (おばあちゃん) のな、いまおる姉さんよりも、最初に生まれた女の子がせつ子。まる3歳になってな、死んでもた。いちばんかわいいときに。[朝鮮から] 姑 (おばあさん) 呼んで、大阪に一緒におるとき、戦時中な。お父さんのお母さんも、もう目のなか入れてもな、痛くないほどかわいがった子が、急に病気になって死んだんや。その子が天使になって、お母さんに直接降りて来たんや。

その子がしゃべるンや。[造り] 花置いとつたら、チャチャチャチャ。私ら、姉ちゃんら、大阪におるとき、そのしゃべるやつでな、追いまわされて、逃げ回ったことあるで。大阪、二階建てやったから、二階逃げたりして。子ども心にもな、覚えとるわ。ものすごい、人が観 [てもらい] に来たんや、運勢を。全然知らん人、その噂を聞いて。

母親 (おばあさん) に、なんで、先祖の神さんが来たかいうことは、ちょっとかいつまんで言うわな。母親 (おかあちゃん) がな、27, 8のときに [神さんが] 来た、言いよつた。最初、大阪で、メンシン姉さんが生まれたやろ。メンシンは、お母さんの最初の娘やから。メンシンいうたら、天から降りてくる、天の神さんの使いや。光のごとく昇って、光のごとく降りて来る子。最初の子は、母 (おばあさん) も父 (おじいさん) もかわいがったんやけど、しゃべりだしたときに亡くなった、言いよつたわ。急に熱出してな。それは、[先祖の] おばあさんが産まらして、[天に] 連れて行ったんや。もう、お母さんしかな、神さん降りても受け入れる人がおれへんいうことで、母 (おばあさん) に神さんが来たんやて。

そういうあれで来たから、母 (おばあさん) は、4代前の先祖まで法事しよつた。そやから、いつも [実家に] 行ったら、神棚 (メンダン) に、祀つとうとこに、かわいらしい、3歳ぐらいの [子が] 着るチョゴリあるやん。3歳の子が履くものすごいきれいな靴やら、巾着 (チュム) におカネ入れて。[大阪の] 鶴橋行ったら、ものすごかわいいの売つとうやろ。日本で生まれた子やから、かわいらしい日本のドレスとかな、新しいかわいい靴持って行ったら、「いやー、うれしい」いうて言うんやて。真ん中の姉ちゃんと、ような、鶴橋行ったとき、かわいらしい靴見て、「いやー、これ、メンシン姉さんに買うていこか」いうてな、ほんで、お母さんに持って行ったらな、「いやー、かわいいうて、すごいメンシン喜んどるわ」いうて。

肝心のこと言うてくれるンは、祖霊 (おばあさん) や。ほんで、その使いが、メンシン姉さんや。好きなお菓子なんか買うて行ったら、「いやー、うれしいわ」いうて言うんやて。ほいで、私ら3姉妹 (きょうだい) が、お母さんに内緒で、こっそり旅行へ行くやん。ほんでな、[帰ってきたら] 「おまえら、どこそこ行ってきたやろ」「ええ? なんで?」言うたら、「きょう、どこそこ旅行へ

行っとういうて、メンシンがみな教えてくれた」いうて。お土産買って行かへんかったら、えらいことや。そやから、こっそり内緒で、姉妹（きょうだい）だけで行くとするやん。ほんでも、お土産は必ず買って行きよったもん。

### 神さんの罰を受ける

〔母に2番目の〕姉ちゃんができたとき、昔の人いうたら、お産したらすぐ働くでな。〔出産〕する瞬間まで動いて、家でひとりで産むやん。お父さんは仕事行っとうし。ひとりで産んで、母親（おばあさん）自分でへその緒を切って、みな〔自分ひとりで〕したんや。誰もおらへんやん。〔最初のお産のときは〕実母（おばあさん）がおるから、実母（おばあさん）のしようやつ見て〔いたのを真似て〕自分でへその緒を切ってした言いよった。

昔の人は、べつになんにもない人でも、お産したら、枕元にちゃんと、水と米と鉄とわかめを置いて、糸を置いて、赤ちゃんの神さんを祀るわけや。赤ちゃんを守ってくれるん。みな、したんや。私（おかあちゃん）も、おまえらみんな〔を産むとき〕、それをしとったンやで。

ほいでな、2番目の姉ちゃん生まれたときに、寝とったンやで。ほんなら夢で、白い服着たおばあさんが出てきて、「女ばっかりやいうてさみしく思うなよ。次も女の子ができる。でも、さみしく思うたらあかんで」いうたンやで。そのあと、妊娠したやん。あの〔北〕朝鮮〔へ〕帰った姉さん、ひさ子。ほんなら、そのときは神さんもまだ来てへんときやから、〔ただの〕夢や思うて。3人目は男や、と思うやん。流産したらあかんと、そらもう、大事に大事にしてな、臨月迎えてな、産んだんが、女やってな。もう、どんだけがっかりしたか。

ほんで、その女〔の子が〕生まれたときに、また寝とったらな、おんなじ神さんが出てきてな、「女やいうてさみしく思うなよ。この子は弟〔が〕生まれるようにしてくれる子やから、さみしく思うなよ」いうことを夢で言うたのに、ウソや思って。女やからいうて姉ちゃんをな、もう嫌うて嫌うてしとったンやで。

そないしてしよったら、1つ違いで、すぐにもう、おなか、あく間もなしに妊娠したんやで。ほんならな、母（おばあさん）が、4人〔も〕女できたら大変やいうて、ひさちゃんのときは大事にして産んだのに、今度はな、もう、あらゆることして流産さそう思うて、煙草をな、水に溶かして、あんなきつい汁を飲んだりな、縄跳びみたいにしてな、土手から飛び降りてみたりしてな。「流産さす」いうて。「女、続く」いうて。なんぼあらゆることしても流産せえへんのよ。ほんでな、最後には「おまえは、なんでそんなことをするんや。男の子やのに。なんぼそないしてもな、生を享ける子は死なへん」と。「そんなことした、あかん」いうてね、夢でまた、知らせてくれたらしいんです。

そないしてしようときに、産んだら男の子やったんやで。ほんで、「この子が生まれたら、この子をいったん韓国のお寺に捨て」いうて〔夢で言われたンやで〕。すぐに韓国に籍入れて、捨て子みたいにして。1回そないしたら、寿命延びるいうこと。ほいで、名前まで付けてくれたらしいンや、夢でね。まあ、夢いうたって、現（うつつ）みたいなンや。もうね、はっきりと。で、キム・チョンニユルいうて、言うとったとおりに名前書いて、生年月日やらみな書いて送ったら、韓国でしてくれたんや。韓国に親戚がおったから。お寺へな、「あなたの子どもにします」いうて、兄ちゃんを預けて、おカネもみな送ってな、

したらしいんやて。

ほんでね、それから3年〔して、私が生まれた〕。〔兄が〕生まれたときに、「チョンニユルのあとに女の子ができる。〔女やからって〕ぜったいにさみしがらんと、養育（あれ）せえよ」。それで、私の名前も神さんが「福年（ボンニョン）いうて、付けえよ」いうて言うてくれたらしいんですよ。「この子は、大きな福じゃないけど、福をもって生まれるからなあ」いうて。「お母ちゃん、ほんま？」「ほんとや」。「この子が中心になって、なんやかんや、きょうだいとおまえらにな、世話してくれるで。せやから、ぜったいさみしがったらあかんで」いうてな。

で、私、生まれて。〔母は〕腹が立ったんやね、女やいうて。お父さんはね、〔生まれた〕朝、〔私を〕見て、もう大事にして。〔父親は〕女でもかわいがるから。私は旧でいうた1月の9日生まれなんですよ。もう、いっちゃん寒いときです。そのときに、お父さんが仕事行ったらね、〔母は〕私を真っ裸にしてね、縁側に出しとくんやて。ほんだらもう、赤ちゃんでしょう、生まれたての。赤ちゃんが、あの寒（さぶ）いのにねえ、口、真っ青して。からだ、真っ青して。お父さん帰って来たら、ちゃんと温（ぬく）めとくんよ、服着せて。ほで、お父さんが会社行ったら〔また裸にする〕。

3日続けたときに、こんどはね、お母さんがその状態になってしまったンよ。もう起きることできない。震えて、寒い。ものを食べられないいう状態になって。それが続くから、父親が仕事行かれへんやん。兄ちゃんがおるし、姉ちゃんがおるし。みんな年子で生まれてる。2番目の姉とその次が年子。ほで、その次に生まれた姉と兄が年子。そんな子お〔らと〕、私、生まれたての子お置いて、どないもできへんなってしまった。〔家の中のことは〕お母さんがぜんぶしてるからね。それでもう、病院行っただってもう……。そのときは病院行くいうたって、おカネ、ものすごいから。ちょっと一回診てもろうたら、たいがい家でもう、養生するでしょう。ほで、あかんからね、お父さんがこっそりと、どっかに聞いて。近所に朝鮮のおばあさんがおってな、その人に聞いたらね、「ひよっとしたらな、お産のあとやから、神さんがな、なんか、祟り（あれ）しとってんかわからへん。私が知ってる拝み屋（ひと）がおるから」。大阪からちょっと離れたところに、嶋野（しぎの）いうところがあるんですよ。そこにね、〔拝み屋の〕おばあさんがおって。そのおばさんをおんできてくれたらしいんよ。父親がもう、困ってもうたから。

ほんで、その人が来てね、赤ちゃんの神さんに拝んだらな、「この人、赤ちゃんの神さんにもものすご、罰を受けてる」いうて。「なんの罰？ なんの罰？」「ごっつい、赤ちゃんの神さんが怒ってね。もう、子どもも親も〔あの世へ〕連れて行く言いよう。えらいこっちゃ」いうて。そのおばさんもちょっと、まあいうたら、お母さんみたいな、巫堂（ムダン）みたいなひとやけど。——母が言うのには、「これが、自分の神さん来る先生やったんや。神が天からの道をつけとんみたいなもんや。いま考えると、そうやあ」いうて。

ほんでまあ、父親も、拝んでもうてせなあいかんでしょ。〔父は拝み屋を〕ものすごい嫌いなんですよ。〔でも〕しょうがないから、「謝りますう」いうて。その日、仕事休んで。拝み屋さん、その赤ちゃんのところで拝んでね。父親も、ものすごい儒教の国やから、もう、こないして〔膝ついてお辞儀して〕挨拶してな。ほな、その人がね、ものすごい拝んで、「ぜったいにこれ、罰を受けて



る。覚えがあるかないか言えへんかったら、治せへん、言いようでえ」。母親が覚えがあるから、「すみません、ごめんなさい」って、母親もそこで謝って。ほんでな、「明日になったら起き上がるからな。ご飯も食べるようになるからな。あんたら許したる、言いようから、ぜったい二度としたらあかんでえ」いうて。

私を1週間もね、「死ねえ」いうてしたんが、[あとになって]「おまえが、みんなのなかで[いちばん] ようしてくれる子おやなあ」いうて言うた。「ほんま、よう、そんなことしたなあ」いうて笑(わろ)うたけどね。

### 「神さん」を受ける

母親がねえ、20 なんぼやった。兄ちゃん、姉さんが、[小学校]1年生か2年生くらいするときやと思いますわ。お母さんが急に、またね、身体が悪うなって。それこそもう、ほんまに、ものも食べない。起きられない。衰弱していく一方なんよ。ほいで、病院やらね、聞いてみても[原因はわからない]。[子どもが]ようけいっぱい、ズラズラッとおるし。もう、父親も困るから、[鳴野の]あの人を呼んで、聞いたら、「この人な、このまま置いといたらあかんで」と。「この人はな、神さんを受けなあかん人や。お祓いして、神さんを受けるようにしてやりい。そやないとな、この人、あかんでえ」いうて言うてくれたらしいん。ほんだら父親、ぜったい反対。「どんなことがあっても、せえへん」言うたらしいんや。ほんだらね、「あんた、[神さんが]あんたの奥さん、連れて行く、言いようでえ」と。ほんならな、「ちょっとまた、日にちおいてしますから、とにかく、いまは助けてください」「そうか。するんやったら助けたる」いうて、ものすごい押んで帰ったら、明くる日から、お母さんがご飯ちょっと食べるようになってな、ちょっとな、起きあがれるようになって。ほんなら、もう[父親は]それでよかったと思うやん。——お母さんはなにも知らんねやで。全然知らんねやでな。——押んでいった思うたら、体が回復しだして、ご飯食べて、ちょっと間、そないしてしたらな、元気になったんや。そないしよったら、また、1ヵ月もせんうちに、自然と寝込んでまうンや。もう、起きあがられへんのや。熱は出えへんねやけど、ご飯食べられへん。もうしんどおて、なにもできへん。それがな、何ヵ月も続いたんや。ほんなら、そのたんびにおばさん呼んだら、「あんた、する言うとして、なんでせえへんのや。する言うから神さんが助けてくれとうのに、せえへんから、神さん、怒っとンや」いうて。3回か4回目に言いよった、「あんた、このひと死ぬで。ウソ言うたらあかんのンや。死ぬで」。

ほんで、しょうがないがな。親方におカネ借りて、せなしょうがないやん。ドンドコ<sup>3</sup>して神さんと呼ぶんや。神さんと呼んでな、お母さんに来るようにする儀式をするねん。ほんなら、普通の家ではあかんねん。山の神さんが来るんや。山の神さんということは、いちばん偉い神さんや。お母さんは、山の神さ

<sup>3</sup> ここで「ドンドコ」と表現されているのは、クツと呼ばれる、巫堂が歌舞賽神を中心に行なう祭儀のことと思われる(崔 1981=1984: 142)。クツの最中の太鼓を叩く音から、このような表現をしているのだろう。わたしたちは、中村幸子さんのほかに、「自分は巫堂だ」という人から聞き取りをしたことがあるが、彼女はクツのことを「ドンドン」と表現していた。

ん、水の神さん、天の神さん、先祖の神さんがみな来とん。来とうから、もうなんでも当てよったんや。ほんなら、山へ行かなあかんねん。

私、覚えとうわ。ドンドコすんのに、なんでお母さん、こんな死ぬ思いせなあかんの〔と思ったんを〕覚えとうわ。〔そのとき私は〕6歳か7歳やったと思うわ。弟の子守りについて行ったんや。——そやから、母親（おばあさん）死ぬまで、よう言いよったもん。「おまえには、ものすごい、子どものときから苦労かけた。子守りばっかりさした」いうて。私は子守りで、母（おばあさん）についてまわったから。よしおがおるやろ。たつおが生まれたやろ。そのあいだに、女の子1人、よしえが生まれたやん。姫路（こっち）来て、終戦後な。その子の子守りも私やろ。そやから、母（おばあさん）は12人産んどんや。あの子も3歳で、しゃべるとき死んだ。私ら、みな、死ぬも立ち会うたから。男1人に女2人死んどうからな。いちばん上の姉さんと、よしえと、たつおの下に男の子1人できたけど、すぐに死んだんや。

ほんで、お父さんがな、背中に釜を背負って、鍋やら米やらいろんなもん背負って、みんなと一緒に、生駒山のお寺の住職（おじゅっさん）やと思うんやけどな、ほいで、拝み屋の巫堂（ムダン）のおばさんを先頭に、山行くんや。山のてっぺん行ったら、ものすごい広い祠（ほくら）があんねん。岩のところに、穴が彫って〔あって〕、神さんかなんか祀ってあったわ。そこへ行って、ドンドコするんや。その山でな、パーッと立とう背の高い笹、1本切って、それに赤や黄と緑の布（きれ）つけて、その祠の前、立たしとんや。ほんなら、おじゅっさんはお経読んで。踊りをしとうもんが〔いたり〕、太鼓叩いて〔いる人がいたり〕。母（おばあさん）にな、その祠の神さんの前へ座らして、「笹持って、じーっとせえ」言うん。ほんなら、なっかなか神さんが降りてけえへんのや。も一のすごい時間かけてな、お祈りして、山の神さん、天の神さん、地の神さん、水の神さん、そこらの生駒の神さん、故郷の韓国の山の神さん、鎮守（ちんじゅ）さん、戎（えべっ）さん、もろもろの神さんと呼んでな、するんや。なかなか、降りひんねん。母親（おばあさん）、言われるままに〔笹を〕持って1時間くらいじーっとしとんや。儀式（それ）するのには、生物（なまもん）とか肉、断たないかん。あっちでお父さんはご飯炊いて、ナムルしたり、なんやかんやしとうやん、手伝い人と一緒に。〔でも〕それするときは、お父さんはちゃんと横へ座らしとうやん。

もう、忘れもせえへんわ。じーっと母親（おばあさん）がな、神さんの前に目つぶって男座り<sup>4</sup>しとう。ちょっと間したらな、笹が勝手に動きようわけ。笹に神さんが降臨（あれ）して。ポソソ履いて、韓国の服、チュメ着とう母親（おばあさん）がな、ぶわーっと〔笹を〕放った思うたら立ち上がって、両手で、四方八方、挨拶しよんや。神さんが乗り移ったからや。ハンメ〔の霊〕が来たんや。

母親（おばあさん）、口からパーッと韓国語で、「この日を待ってた。なんで、こんなに遅いんや。この日を逃したら、おまえ、この李家はあらへん。子孫を助けるためにわしが来た」いうて、祖霊（おばあさん）がな、メンシンを連れて、この笹に降りて来たんや。「この日を逃したら、わしの子孫はおらへん。子孫を助けるためにここまで来たのに、なんでおまえはわからへんのんや！」お父

<sup>4</sup> 「男座り」とは、あぐらをかいて座ることを指す。

さんに〔むかって〕「なんでこないなるまで、おまえはわからんのんや！ おまえ、いまでもウソや思うはずや！」いうて。

ほな、ほんまやったんや。父親（おじいさん）はな、助けるためにちよつとしただけで、そんなもん、ウソっぱちやと心に思うとったらしいんや。「おまえは！ 心の中、読めとう！ ウソや思うとったら大間違いやぞ！ ほんまやいうこと知らしたる。おまえの眼でほんとうやいうことを確かめられるように、きょうは連れてきた」というてな、母親（おばあさん）が父親（おじいさん）見てから命令的に言うやん。自分の旦那見て、朝鮮語で。上の人が下に言うもの〔言い〕を言うやん。もう、母親（おばあさん）、初めてのことや。神さんが言うから、わかれへん。勝手にしゃべるんや。

ほんなら、その神さん来たら、おじゅっさんとか、「はあー、わかりました。わかりました」いうてな、お経上げて、叩いたり、捏ねたりしとって。ほんなら、〔母が〕2メートルも3メートルもあるような、でかい笹のとこ飛んで行った思ったら、その持とった神さん来た笹を、〔背の高い〕笹にひっ付けた思うたら、パッとその笹に〔神さんが〕乗り移って、笹が立ったんやで。切って置いとう笹がまっすぐ立ったんやで、勝手に。手もつけへんのに。ほんで、みんながびっくりしたんや。そのおじゅっさんも、一緒に来た人らもびっくりしたんや。お父さんもな、びっくりしたらしいんや。立つはずないやん、笹がいっぱいで、こんな細いやつが。お不動さんの神さんのとこで、お母さんがものすごいひれ伏して挨拶して。もうそのときは神さんが乗り移っとうから、神さんがさしよったんや。ほんで、そこらの山全体の神さんに知らすために、鉦（かね）や太鼓鳴らして、「お願いします」「ありがとうございます」いうて、朝鮮語でもものすごいお経あげて。

ほんで、母親（おばあさん）が笹持って、お父さんをその横へ立たしたんや。ほな、笹のてっぺんでな、「アボジー！」って呼ぶ声がしたんやて、女の子の。「アボジー！ わたしや！」いうて呼んだんやて。ふつとな、みんな見たんやけど、お母さんとお父さんの眼にだけ映ったらしいんや。他の人〔の目に〕は絶対映らへんねん。「アボジー！ アボジー！」いうて、3回呼ぶから、ふつと、3メートル先の笹のてっぺん見たらな……。死んだ姉さんを棺桶に入れるときに、ものすごいかわいらしいセットンチョゴリをお父さんの手で着せたらしいんや。ほいで、棺桶に入れて葬式したらしいんや。それは、お父さんが、まさに自分の手でしたんや。その娘が、笹のてっぺんに立って、その服装のまま、かわいらしい靴履いてな、「アボジー！ わたしや！ わたしがわかれへんか！」いうて、朝鮮語でしゃべったんや。お父さんがそれ見たんや。それから大変や。びっくりして、ほんまやいうこと〔がわかって〕。「アボジ！ これでもウソか！」韓国語でな、「わたしが来たんや！ アボジ！ お父さんお母さんら、わたしのきょうだいを助けるために、わたしが来たんや！」いうて、〔姿を〕見したんや。それで〔さすがの父親も〕信じて。

〔でも〕1回や2回で、神さんは絶対来れへん。それから何回も、ちよつと聞いたら倒れて病気なって、ちよつと聞いたら……。完全に受け入れなあかんためと、1人や2人の神さん違うから。そやからな、何回行った思っとな？ 生駒山、信貴山、山いう山。父親（おじいさん）働いて、ちよつとしたらな、ドンドコせなあかん。父親（おじいさん）ほんまいうことわかって、目が覚めて。「完全に受けたら子孫助ける」いうことで。

ほんで、海行ったら、海へ入って。真冬の凍りついたところでも入ってするん。お母さん、それしてきたんやで、真冬でも。ほんで、山の神さんのとこ、1日に何回も参りにあがったりしたもん。それもな、神さんの力なかったらあがられへんねん。神さんの力、貸してくれるからあがるんや。それしたり、ドンドコ、何回した思う？もうな、財産使い果たして、なんにもないぐらいに。ちよっと貯めりゃあ、ドンドコせなあかんかったんや。

それで、神さんを完全に受けたんや。受けて、ほんで、最後に大阪〔の〕家で、「ほんまに来たか、ウソか見ろ」いうて、最初道つけたあのおばあさんが来て、拝んで。ほいで「花持ってこい」。〔造り〕花な、こう置いとくんや。拝んで、なんやかんやなんやかんやして。この花から、もの言うたんや。ほいで、ほんまの神さんが完全に来たいうことをわかって。そこでな、「最初にお客さんが来る。そのお客さんが来たら大きな仕事ひとつ取れる」いうて言うてくれたんやて。

### 巫堂としての初仕事

ほんなら、明るる日、言うたとおりに、どこからか知らんけどな、よう当てる神さんが来た人おるいうことを噂で聞いて、ひとりの人が来たんや。その人がな、なんにも言わへんねや。「ちょっと一年の相を見てくれ」いう〔だけで〕。夫婦で来とったんやて。全然知らん人やった。岡山かどっか〔から来た〕言いよった。この人はな、人づてに聞いて、ほんまかウソか、当てるか当てへんか、困っとうから聞くだけ聞いてみろいう気で来たわけや。

ほんならな、〔母が〕「あんた、娘が病気やな？」いうたら、「はい、病気です」。「この娘はなにかが憑いとう。おいといたらあかんで。気がふれるで」。気がふれる寸前みたいになっとなや。「ほんまのこと言えへんかったら、〔神さんも〕教えてくれへんで」と、母親（おばあさん）が言うたら、「じつは、どなーいもない20歳（はたち）の娘が、変なんや。どこへ病院に行っても、病気じゃない言うんや。あらゆるとこ行って聞いても訳がわからへん。ここやったら教えてくれるから、いっぺん聞いてみ、いうことで来たんやけど、どうしたらええか？」「この子は狐みたいなんが憑いとうから、離せへんかったら、気がおかしなるで」と言うたら、その人らもびっくりしてな、「してくれるか？」と。「するかせえへんかは〔あんたらが〕決め」いうて。ほんならな、「したら、この子治るか？」「絶対治る」。母親（おばあさん）がな、自分が言うてへんのに、勝手に〔神さんが〕バーッと言うてくれるんや。「ドンドコして狐を離したら治る。こっちでみな段取りするから、なになにだけ用意して、料理用意して、みな、おれよ」いうて。ほんで、日にち貰うて、「きょうの晩から、ちよっと、この子、ようなると思う。見とってみ。だいぶ、ようなると思うで」というて帰らしたんやて。

ほんなら、その日にちのときに、母親（おばあさん）が、そのおばあさんと一緒にドンドコしに行ったんやて。山の麓（ふもと）に家建てて〔住んどったら〕、どういうわけか知らん、20歳（はたち）の娘が、どないもなかったのに、急に、調子悪そうにして、おかしなこと言うたりするようになったんやて。母親（おばあさん）その子の顔、じーっと見たらな、ものすごい睨み返しよったんやて。狐が憑いとんや。「この山の奥、てっぺんのほうに、お稲荷さんがないか？」いうて言うたらな、「ある」言いよったんや。ものすごい古いお稲荷さんがあ

るンやて。「そこのお稲荷さんに罰を受けとうわ。この子が、なんかしたはずや。そのお稲荷さん行ってお祈りせえへんかったら、あんたとこあかんで」。

その日、夕方、暗なるぐらい、明日からかかるよう、ちゃんと神さんにお祈りしてな。ほんなら、暮れて、9時か10時ごろなったらな、その家のな、戸がガタガタ、ドッチャンバッチャンと音がしてな、小屋の戸がひっくり返ったりな、ものすごかったンやねんて。ほんなら、その家のおっさんやら、親戚が来とうやん。拝み屋が来てしとういうことやから、田舎はいっぺんでわかるやん、朝鮮の人やから。ほんなら、「なんやこれ、どないなとんや！」いうて。もう、ガタガタの小屋の戸がやな、急に、ガチャガチャガチャ、ドチャンバチャンいうて、ひっくり返ったり倒れたりして、ものすごかったんやて。

ほな、母親（おばあさん）はわかっとうたらしいんや。お稲荷さんが、「どんなもんが来たんや？古い古いお稲荷さんの神さんの、わしより偉いもんがおるんか！」いうことで、お母さんを試しに来たんや。そないして、ガタガタガタガタしよっても、母親（おばあさん）はびくともせえへん。じーつとしてしとうときに、それが収まって。

明るる日、朝早うに、神さんに拝んで、母親（おばあさん）が全身に神さんを受けた思うたらな、「竈（かまど）の炭持ってこい。炭と、赤や黄の、色のつくやつ持ってこい」いうて。ほんなら、竈は真つ黒けやん。それを、お母さんが手に塗って、顔にビャーッと塗って。赤いやつは、なんか、絵の具あるやろ、それをな、ブワッと付けて。頭に、赤と黄と緑の布（きれ）で、3種類の鉢巻きして、ごっつい顔して拝みだしたんや、女の子座らして。「おまえ、わしに勝てるか！」いうてお稲荷さんの神さんが来て。「わしに勝てるんやったらやってみー！」いうて、神さんと神さんの戦いや。ほいで、それをこの子から引き離すのに、赤や黄の布（あれ）を体に巻いて、竹であれして、ものすごい拝んで。

お稲荷さんが負けたんや。お稲荷さん、「あんたみたいな人は初めてや。負けた」いうて、その子からスツと〔消えた〕。その子もフニャーとなって。「寝かしとけ。3日3晩寝るはずや。寝て起きたときは、この子は完全に治つとうから心配すな」と言うて、2晩寝て、3日目にお母さんは帰ってきたんや。

それからだいぶんしてな、夫婦で挨拶に来たんやて。〔その娘は〕3日3晩寝て、起きた思うたらな、「ああ、お腹空いた」いうて。それから治ったんやて。なんか、山行つて、そのお稲荷さんの地所のなんかを取ってきたみたいなんやな。それで怒って、娘に罰を与えとんや。

それがな、神さんが最初に来てな、大きな仕事して示したシルシやつてン。それで生活を助けるようになった。

### 山の神さんが目に電気を付けてくれる

この〔姫路に来てからの話やけどな〕、そうめん滝だけでも、ウソのようなほんまの話があったんやで。夜中の夜中に、電気もないのに、山のとっぺん、母親（おばあさん）走つて行くンや。「みな、懐中電灯持ってやないと、あんなとこ行かれへんのに、お母ちゃんはどうして行けるん？」言うたらな、「目に付けてくれンねや」って。目にな、山の神さんがな、電気パツと付けてくれるんやて。もう、自分でわかるんやて。ほんなら、昼みたいに見えるンやて。

〔山は〕すごいやんか。陰しいで。ドンドコする人の〔付添いで〕山のとっ

ぺんの神さんまで行く男の人ら、[母親が]「懐中電灯持って付いて来いよ」いうのを、その人が「はい」いうて、お母さんと一緒に行くんやて。ほんならな、もう、その人らが「どこですか？」いうてお母さん見たらな、足、地につけんと飛んで行きよんやて。ほいで、上のほう、先に神さんとこ行って挨拶するんやて。挨拶が済むやろ。ほんで、降りてくるの、みながびっくりするんやて。「待ってください」いうて、懐中電灯で[照らしながら]3人ぐらいの男の人がな、付いてくるんやけど。お母さんはな、お寺さんの庭(マダン)近くまで来たらな、目のな、電球がなくなるんやて。[神さんが]パッと電気とってくれるんやて。

### 汽車止めてドンドコした

昔な、お婆さんが、岡山駅で降りなあかんのに寝過ごして、駅から離れた石炭のガラがいっぱいこぼれとう、そこへ飛び降りたらええ思うて、[汽車が]行きようときに、パッと飛び降りたんが、前こけりやあどないもなかったんや。ところが後ろへひっくり返って、汽車に轢かれて死んだんや。毎年、そこで1人や2人は死によったんやて。ほんで、その娘夫婦が、「お母さんが自分どこへ来よって、[自分の]霊を引き上げてくれいうて来たんや」と。[私の]お母さん、もう有名やったからな。私、またそのとき、ひろ子の子守りで行ったんや。ひろ子、乳飲み子(やーこ)のときやって、連れて行かれたんや。

あのときな、駅のホームに駅長室があったんや。そこでな、ご飯炊いたりな、ナムルしたり、さしてもうたんや。ドンドコするところ、ほんまの死んだとこやないとあかん[から]、汽車止めたんやで。すごかったんやで。お寺のな、おじゅっさん2人と、女の人4人連れて。娘や息子やらみな出てきて。ほいでもう、鉦や太鼓でダンドカダンドカ叩いて、神さん呼んで、閻魔さん呼んで。お母さん、鉢巻きして。2メートル、3メートルもある笹持って。むこうの線とこっちの線あるやん。で、ど真ん中の本線の、[駅から]ちょっと出たところでするもんやから、しようときに、むこうの、行く汽車の窓から、みな見よったで。なにしようか思うたんちがう？ 駅員がみな出てきて、やっぱり、見るんやな。昔やから、さしてくれたんや。

あのとき、私が13、4のときや。眠たいのに、駅長室でな、ひろ子を負うてな。[大きくなってから]「あの眠たいンだけは、ほんまに、いまでも忘れへんわ」いうたら、[母親は]「ほんまや。おまえはひろ子負うて、居眠りしよった。わしは、それ見とったら、ほんまつらかった」いうたけどな。

ほいで、霊がなんぼでもあがってくるのに、[肝心の]本人、あがってけえへんねん。次から次へ霊あがってきてやな。「わしから先や」「わしからや」いうて。順番にあげへんかったら、あの人[の霊]が出てけえへんねん。それで、線路ボンと飛び降りて、山の裾まで飛んで行って、閻魔さんにひっ付けるんや、1人ずつ。何回行きよんか思ったんや。体力なかったら、神さんの力なかったら、できへんねん。飛ぶように飛んで行くもん。その閻魔さんにな、その木の神さんにひっ付けて、順番に。最後にあがってきたんや。そやから、ものすごいしんどかったんや、お母さん。

### 巫堂の仕事を嫌った父親

[父は母が巫堂になって]複雑な気持ちやったと思うで。母親(お婆あさん)、

ひとりで、北は北海道、南は九州まで行くから。ひとりでできるやつは、ひとりで行ってする。ひと連れて行ったら、おカネが1,000円出たら半分ずつせなあかんやろ。で、神さん、ひとりで行けるやつやったら、ひとりでええ言うわけやねんて。あかんかったら、ひと連れていかなあかん。

食べもんなんにもない時代やん、はっきり言うて。〔ドンドコやったらお供えに〕果物やらお米が出るやん。それは、〔ドンドコ〕した人が持って帰れるようになってン。それを、お母さんがな、重たいのを抱えて持ってくるから、白いご飯食べられる。果物（くだもん）も豊富にある。ない家でも神さんにお祀りするために買うから。それをな、〔いっしょに〕行った人と分けて持って帰ってくる。ほんなら、うちとこは子どもがいっぱいやろ。食べるもんないやろ。戦時中もやけど、終戦後なっても、ずっとそれは続いとうから、お母さん、ドンドコしにあっちこっち行くのに、何日も泊まったりせないかんやん。ほんなら、やっぱりお父さん、男やから、それが嫌でな。ような、一杯飲んで喧嘩しよったんや。「なんぼあれやいうたって、女が家空けて……」。

そないしよううちに〔父は66歳で亡くなった〕。「なんで、そんな早うに亡くなったん？」いうて〔聞いたら〕、「まあ、それもな、お父さんおったら、この神さんをまともに受け入れてできへんいうことがわかつとうから、早めに連れて行ったと思う」言いよった。旦那おれへんかったら、ひとりで飛び跳ねて行けるやん、神さん受けて。それで生活ができるんや。そやから、「どうも、先祖が連れて行ったんちがうか。子孫助けるために。ほんで、枝が広がった。わしの代で、こんだけ新井家の子孫が増えたんや。神さん、もししてへんかったら、お父さん一代で終わり」言いよった。「そのために、わしが普通の人がしてへんことを体で受けて……」。

### やくざの親分の家に行った話

昔ね、「猿の腰掛」が癌に〔効くいうて言われとった〕。もう、ごっつい大木に生える。それも、ようけできない。それを買って売ったら、もう、ごっつい金儲け、いつときできたいう時期あったでしよ。〔あるとき〕「明日、奈良方面へ行こう」いうて、母親（おばあさん）が急に言うたらしいんや。ほん、〔弁当屋の〕商売しようから、そんなン急に言うたってあかんのに……」いうたら、「もう、ひとに任して、行こう」いうて。もう絶対に、お母さんの言うとおりにせないかん。ほいで、乗用車で奈良方面へ。何もわからんと、「こないこないでやな、猿の腰掛を買いに来たんやけど、誰か持とう人おりませんか？」言うたらな、「ああ、この向こうのほう、誰それさんの家行ってみなさい」いうて言うたから、そこへ辿って行ったンやて。着いた思うたら、門構えがすごい白木の家でな、ものすごく大きな立派な家やったンやて。ぱっと見た感じ、普通の家ちがう。ほんで、ふっと見たら、門の両方に黒いスーツ来た人が2人立っとんや。塀で中は見えへんやん。母親（おばあさん）が「〔神さんが〕ここや言いよんや」いうて言うたら、兄（おっちゃん）と姉（おばちゃん）が、「お母さん、ここ普通の人の家ちがうで」。やくざの家やいう感じが、いっぺんでわかつたらしいんや。「帰ろう」いうて言うたら、お母さん、「そうか、やくざの家か。ここまで来たンやからな、なにも帰ることない。あかんかったら帰ったらええンや。聞いてみ」いうから、お母さんの言うとおりに、その表の人に「じつは、こないこないさんですか？」いうて名前を言うたら、「そうです」いうて丁寧

に挨拶しよったらしいんやて。ほんで、母親（おばあさん）と姉（おばちゃん）が〔車から〕降りてな、「ここの主人に会いたいんです」いうて。「用件は？」「いや、ちょっと〔からだの〕調子が悪いから、猿の腰掛な、効く言うからね、それをわざわざ買いに、ここまで探して来たんですけど」いうて言うたら、「ちょっと待ってください」いうてな、ちょっと聞いて、中からまたその人が出てきて、「どうぞ、こっちの木戸から入ってください」いうてな、案内しよったんやて。そしたら、「なにが木戸からや。お客さんは玄関から入るもんや」。年いった母親（おばあさん）がそない言うてな、表玄関ポツと立って、「こっから入る」いうて、声出したらしいんや。ほんだら、「いや、あちらからどうぞ」いうて、こないして横の木戸へ指したんやて。〔兄も〕「お母さん、『木戸から入り』言いようで」いうて言うたら、「お客さんはどんなお客さんでも、木戸から通すもんちがう。玄関から通すもンや」いうて、ごっつい大きい声出したんやて。ほんだら、中で聞いとったんちがう？ 中から「玄関から通せ」いうてな、玄関の扉をバーッと開けて。

もう、すごい家やったんやて。立派な庭園があつてな、すごい和風の造りの家で。タッタタッタッとお母さんが先頭になって、入つてな。ほんで、母親（おばあさん）、あの、ものすごい〔朝鮮の〕アクセントが残る日本語で、「こんにちは」いうて入ったんや。そしたらな、中の人「どうぞ」「あがります」いうてな、タッタタッタッ。母親（おばあさん）が先に入って。姉ちゃんと兄ちゃんが、パツと入ったらな、あつちの部屋でな、「張った！張った！」いうてな、花札したりしてな、すごい声が聞こえよったんやて。もう、その奥、ごっつい広いからな、タッタタッタッと入って、和室の、ものすごいテーブル、テーブルでも普通のテーブルじゃない、根っこ切つとうテーブルな、その真ん中へドーンと。ほいで、その真前、母親（おばあさん）座つて。見事な床の間に恐ろしい日本刀、ダンダーンと3本飾つてな、おるとこ、ジーッと座つとったんやて。

ほんだらな、しばらくしたら、親分らしい人が出てきて、床の間を後ろにしてバンツと座ったんやて。もう、目、グリツとしてな、ものすごい。ほんだらな、兄ちゃんと姉さんが挨拶をしたんや。母親（おばあさん）は挨拶せんと、ジーッと座ったまま。兄ちゃんが「わたしの母です」いうて、「あの、この度、母が具合が悪いので、猿の腰掛がよう効くと人伝てに聞いて、姫路からここまで来て辿りついたんです」と、自分らが来た経緯を説明したわけ。そしたらね、お母さんがどないするいうたら、頭下げりゃええのにな、一点、その人の顔をジーッと見つめたら、その親分も負けてへんねや。5分ぐらい、ふたりのな、睨みあいが続いたんやて。ほいで、5分間睨みおうた思うたら、親分から目をそらしたんやて。親分が目そむけた思うたら、お母さんが「あんた、ここの家の主人やなあ」いうて言うたんやて。ほんだら、「はい。遠いところをご苦労さんです」いうて、親分がな、先に言葉をかけたんや。「あのときの睨みあいいうたら、すごいもう、ぼくら、姉ちゃんと2人、どんだけドキドキしてな…。これは普通の家ちがうとこへ来てしもうて、えらいこっちゃ思うたんやけどな。ものも言わんとバンバーンと『こんにちは。あがります』いうて上がったお母さんが、デーンと床の間のテーブルの前に座った思うたら、その一点から動かへんねん。どんだけ怖かったか」いうて。

ほんで、そないして言葉を交わして、親分が「お茶持ってこい」いうて。そ



の親分が「おばあさん、冷たいお茶がええか？ 温（ぬく）いお茶がええか？」  
 いうて聞いたんやて。ほんだらお母さんが、「わしは胃の調子が悪いから、温  
 いお茶がええ。この子らは冷たいお茶がいいと思います」。ほんだら、「温かい  
 お茶と、こちらは冷たい飲み物持って来なさい」いうて。ちょっと聞いたら、  
 奥さんや思うんや。お茶を運んで来たんや。ジーッと奥さんを見とって、「あ  
 んた、嫁さんを大事にしいよ。あんた、よう嫁さん泣かしてるな。嫁さんは大  
 事にせなあかんで」いうて言うたんやて。ほんだら、ごっつい怖そうな人やっ  
 たのに、ニコッと笑ったらしいんや。

あときのお母さんはな、口から何が出るんか知らん。わしらもう、怖いで  
 ビクビクしとんのに、その次にどない言うた思う？「あんた、そこの刀で人  
 ようけ切ったやろ。人泣かしたり、人切ったりしたらあかんで。刀はな、そん  
 なことに使うもんちがう」言うてな、グッと睨んで。それに対しての返事はな、  
 ニコッと笑うただけでな。ほんで、「嫁さん泣かしたらあかんで」。また言うた  
 ンやて。「嫁さん泣かしたらあかん。嫁さんは大事にしてやらなあかんで」い  
 うてしたら、おしとやかな嫁さんがお茶出してな、頭下げてな、スーッと行っ  
 てしまうらしい。

ほんで、お茶を飲みようときに、お母さんがパッと〔縁側に〕出て、庭園を  
 見て、「うん。あそこに置いてる石、ええ格好に、ええとこへ置いてる。あん  
 た、この庭、すごいええ。うちとこもな、石あっちこち、ようけ置いて立派な  
 庭があるけど、ここの庭は素晴らしい」。おっきい声でそない言うて、立っ  
 てな、庭をジーッと見て。親分、ほんだら、それをジーッと聞いとって、「ああ、  
 場所、ええとこへ座ってますか」いうて言うたら、「ええとこへ座ってる。こ  
 の石のおかげで、あんたな、ひと儲けするで」。兄ちゃんに、「うちとこの家も、  
 石をもう1つ買って、ここと同じように、庭に置き」いうて言うからな、ああ、  
 これはお母さん、神さんの指示やなあ思うて、「うん。お母さん、わかった」  
 言うて。庭もへったくれもあらへんやん。長屋のちっちゃい家やのに。ほいで、  
 テーブルに、ものすごい立派な灰皿を置いてあんねん。「この灰皿、あんた、  
 わたし、もろうてええか？ ええ灰皿やなあ。この灰皿欲しいな」。相手の親分  
 を試すつもりで言うトン。なにも、欲しいから言うたんちがう。「ええ灰皿や。  
 これもうてええか？」いうて、こないして笑うてな、言うたら、「あ、これは  
 ダメです。その代わり、猿の腰掛をな、分けてあげます」。そない、ニコッと  
 笑うてな、言うた。母親（おばあさん）から、ものすごいオーラが出とったンち  
 がう。親分がもう、びびってもうとったン。このおばあさんは普通のおばあ  
 と違うな、どこかの大親分のおばあさんかと、自分らでそう思うたんちがう。

ほいで、「あっちで『張った！ 張った！』言うてる。博打しよんか？ うち  
 も博打するで。みんな寄ってな、博打して遊ぶんや。私も博打の仲間に入れて  
 もらわれへん？」いうて、廊下のほうへ行きだしたんやて。ほんだら、親分が、  
 「あ、おばあさん、そっちはダメです。またこんど、機会があつたら」とな  
 ったらしいんや。ほいで、兄（おっちゃん）も、ものすごい男前で、背があつて、  
 貫禄のある兄（おっちゃん）やから。ほんで、母親（おばあさん）は小柄や。もう、  
 小柄いうより、縮かんでな、こまいなってもうとうけど。ほいで、そない言う  
 て行きかけたから、兄さんと姉ちゃんが立って、「お母さん、そっち行つたら  
 あかん。こっちこっち」言うて。

ほいで、猿の腰掛をな、だいぶん、何万か買うてきたらしいんや。「おばあ

さん、[いまは] こんだけしかないから。また今度な、分けてあげるから」。ほいで、玄関までな、親分が送ってな。ほな、「おばあさん、気をつけて帰ってくださいよ。また今度、要り用やったらな、来てください」いうてな、門のどこまで送り出した。そやから、母親（おばあさん）が出て行くまでは、もう、普通のちがういうこと、あの人にだけ映ったみたい。

ほいで、「お母さん、あそこ、大親分の家やのになら、『刀で人を切ったらあかんぞ』とかそんなこと言うて、[相手を怒らせたら] どないするねん！」いうたら、「知らんわ、そんなもん。言いたいから言うてもうた」。そやけどな、門から出てな、車のどこ来た思うたらな、もうな、パーッと神さんが出てもうたら、もう、怖なってな、「早よ帰ろう、早よ帰ろう」言いよったいうて。——ほんま、ウソみたいな話やろ。そういうことが実際にあったンやから。

### 母の晩年の大仕事

いま大阪に、Hのおばさんいう[神さん受けた]人おるけど、母親が、亡くなる前に大きな仕事をとって、もう[そのころは] 母親もね、調子が悪いし[あの人に手伝ってもらったんや]。

[母親は] 肉食べない、生の魚を食べない。神さん受けてるから。前は食べたけど、ちゃんと神受けてから、肉類を食べなくなったんや。死ぬまで。魚でも、生の臭いする魚じゃなしに、韓国でいうチョグ、魚を塩漬けにしたやつしか食べない。それとかまあ、鱈（たら）ね、メンテとか。そんなンしか食べない。だから、骨もね、弱るし。もう年いってきたら、[身体が] 弱って。

77歳で亡くなるその年の春に、大きな仕事が入ったんですよ。朝ね、寝てたら、「きょうは、北のほうからお客さんが来る」[と神さんが教えてくれたンやて]。もう、[自宅に] 神さん祀っとうからね。ほんで、「お客さんが来るから。これは、おまえの一世一代の大きな仕事やで」と。

その朝、ピンポンいうて、私とこ、お客さんが来たンよね。きょうだいみたいな付き合いしとう人やけどね、ごっつい会社の社長の奥さんが来てね。「ちょっと、ともちゃん」——昔はあの、[朝鮮人どうしで] きょうだいみたいに親しくしてたら、どないいうかな、敬意を表して、[その人の] 名前よりも[その家の] 上の子の名前を呼ぶんよね。——「ともちゃん」「ねえさん、どないしたん?」「ちょっとなあ、あんたのお母さんのとこへ連れて行って」「なんでえ?」「ちょっと、聞きたいことがあるんや」「なんでやの?」「いやあ、ちょっと、連れて行って」「うん、ええよ」いうて、連れて行ったんや。ほんだら、「あ、ふくちゃん。どないしたん?」いうてお母さんが言うて。「お客さん連れて来たでえ」「朝、北の方角からお客さん来るでえいうて言いよったの、おまえかあ。言うたとおりのやなあ」いうて。

ほんだらな、まあ、この人も賢いのよ。「まあ、とにかく[神さんに] 聞いてえ」。自分の聞いてもらいたいこと、当てるか当てへんかあいうこと[試すンや]。ほんなら、[母親が]「おまえ、あっち行って水、持ってこい」いうて。こんな、これぐらいのちっさいお膳、置いてあるから。そこへ水一杯置いて。で、穴の開いた、昔のあの、何文銭いう硬貨（おかね）があるでしょう。四角い穴が開いて、六角形かなんかになってるの。それを5枚持ってるんです。それでなんで来たかあいうこと、当てるわけや。ほんで、神さんに挨拶して、「だれを観るんや」いうてお母さんが言うた。「わたしの主人を観てください」。で、

旦那の名前，生年月日，何年何月〔何日〕を入れて。お母さん，じい一つとこないして，口でお経あげるんや。もろもろの神さん，呼ぶねんな。鎮守の神さん，お稲荷さん，山の神さん。そうめん滝〔の神さん〕。——姫路（ここ）へ，私らが来て。そうめん滝の廃〔寺〕，東南寺いう，もう潰れて，あかんようなお寺を，お母さんが興したんです。その話はまた〔あとで〕な。

ほれで，「あんたンとこの姑（おばあさん）は，亡くなったんやなあ」いうて。社長の母親が亡くなったんは，私しか知らん。ぜんぜん関係のない母親は，知らんからね。「あんたの姑さん，今年の4月に亡くなったな」と。ほで，ねえさんが〔私の母のところに〕行ったんが，〔姑が〕亡くなって四十九日もしてへんときなんですよ。

でな，この姑さんがすごい怒って出て来たと。「なんで怒っとン？」いうて，ねえさんが聞いたらね，「すごいでえ。もう，わしの思いをみな言いたいいうて出てきよう。あんたのお義母（かあ）さん，『わしのカネ返せえ』いうてる。『わしのカネを，みな，取っていった。わしが亡くなっても，長男のカネや。わしのカネ返せえ』いうて言いようでえ」と。「どういうことや？」いうて〔ねえさんに〕聞いたんや。「ほんまのこと言うてくれんかったらな，神さん，言うてくれへんで」と。

ほんだらな，この母親は，長男がすごい金持ちで，母親のことはみんな長男夫婦がしてやってたんや。それこそ，ほんまに贅沢三昧さしてたんや。家建てて，別に住んどった。ところが，次男や三男や嫁いだ娘らが，母親が亡くなるいうたらもう，つきつきりで。ほんで，亡くなったいうたら，娘と息子が優先的ですよん。一步，嫁は下がりますよん。ほしたら，〔ねえさんが〕おれへんときに，母親のおカネから，貯金通帳から，みんなね，持って行って。自分らでナイポッポしたらしい。「わしのカネ返せ！」って，すごい言うてる，と。「そんなこと，お義母さんが言うてるン？ わかります。ほんまですう」いうて。「でもな，まだ〔カネは〕ある，いうて言うてる」。「いやあ，あんだけ，箆笥をみなひっくり返して，チョゴリもなにも，母親の，みな持って行って，ない」。「いや，ある」いうてな。

「ほんでな，この人な，なんで，死ぬときに好きな服，着せてやれへんかった？ わしの好きな服くれえ，いうて，すごいでえ。『わしが，死ぬときも着ていきたいいうて，大事に置いとう服を，なんで着せてくれへんかったんやあ』いうて」。「へえ，どんな服？」いうたらな，見たこともないし，聞いたこともないから，お母さん，お経あげて，じい一つとしとった思うたら，チョゴリの色と柄と，言うたんですよ。ほおしたら，ねえさんがびっくりして。「ええーっ！」いうて。「それはね，わたしがお義母（かあ）さんに〔プレゼント〕してやったら，ものすごい喜んで。『こんな，好きな柄，好きな色。ものすごい好きや』いうて。〔それ以外にも〕大阪の鶴橋行って，新しいのいっぱい買うてやるンや。〔でも〕それを着んとね，いつもこれをなあ，襟だけ付け替えて，『これがいちばん好きなんや。わしが死んでも，これ着せてくれよお』言うてったやつなんや」と。「せやけどね，死んだときに，着せよう思ったら，着さしで汚かったから，〔鶴橋の店から〕新しいのンをすぐに送ってもうて，死装束，着せていかしたんや」。「わしの服返せえ！ わしの服くれえ！」いうてな，ごつつかったんよ，お母さんの口から。ほんで，「わしの長男が儲けたカネを，なんでおまえらに」。まあいうたら，女はよそへ嫁（い）かしたら他人ですよん。

次男三男も、息子やけど、この姑（おばあさん）は、長男しか知らんのよ。〔ほかの〕みんなは、関係ない。

ほんで、その社長はね、33歳のときに脊髄を損傷して、もう腰（こっ）から下は動かないんや。車椅子です。その人が、ある日とつぜん、保険屋のおくさんに惚れてもうてね。その〔口の〕上手な人にいれあげて。みるみるその女に夢中になって。家は買うたる。ほで、奥さんに「ちょっと出て行けえ」いうて、用事さして、出て行とうあいだに〔その女のひとを〕呼んで。貧乏の保険屋がね、家は建つわ、車は新車買うてくれるわ。息子も旦那も、ホイホイいうて、送り迎えするぐらいやったんですよ。それだけ盲目（めくら）になって。

「あんたの主人は、霊が〔取りついて〕頭から黒い布を被したように〔なつて〕、だれの言うことも聞けへんようになった。これ、そうめん滝のお寺で、もろもろの神さんにお祈りして、姑（おばあさん）のその怒つとうやつをな、祓いのけてしてやらなんたら、あんたの主人、治れへんで」いうて言うたんです。

〔ねえさんは〕旦那（にいさん）のそれを聞きに来たらしいんや。なんぼ息子や娘らが諫めても、ダメなんや。もう、みるみる、おカネを使うから。あんなことしよつたら、大変なことになる。ほれでね、あそこの中村さんとこのお母さんはよう当てる人やいうことで、来たらしいんよ。

ほんで、「あんた、1ヵ月ほど前に、北朝鮮へ行ったんちがうか？」と。ねえさんの身内（さと）は、ぜんぶ北朝鮮へ行ったんですよ。帰国〔事業〕でね。で、身内（それ）を、エンヤコラ助けるために、ちょうど1ヵ月前に行つたんですよ。ほいで、帰つてきた思つたら、旦那（にいさん）が急にあないなりだして。ほいで、「夢見もおかしいし」いうてなあ、お母さんにそないして話ししよつた。「あんたとこの身内（さと）のもろもろも、いっしょに連れて来て……」。

あの、天国から地獄へ行ったみたいなどこやから。もう、日本（ここ）でおつたが天国よ。北朝鮮（むこう）でね、もう、頭おかしいなつたりして、死んだ人もいっぱいおる。弟が北朝鮮（むこう）で、みじめな死に方をしたらしいんですよ。ほで、「弟〔の霊〕が一緒についてきてな。助けてくれえいうて、旦那（にいさん）に覆いかぶさつとう」。お母さんが、はっきりそない言うたんですよ。そない死に方してるというのは、自分しか知らんやん。きょうだいがどうやこうや、そんなこと、しゃべれへんひとやから。私もそれ、はじめてそこで聞いた。「だからな、この弟を成仏さしたりな」と。「ものつすごい、かわいそうや」と。「これ、せえへんかつたら、あんたの主人、治らへんど。黒い頭巾を取つてもうたらなあかん。それは神さんしかできへんことや」と。「そのときに、あんたのな、姑（おばあさん）を先にせえへんやつたらあかん。後したら、あかん」。そこで、「します」と。ほんで、「四十九日すんでやな、そうめん滝行つてしなさい」いうて、日にちもろうて。ほで、「ちゃんとします」と。「3日ほどしたら、あんたの主人、聞く耳もたへんのは、おさまると思うでえ。そないなつたら、連絡して」いうて。ほで、身内（さと）のンも、日にちをもらつて。ほいで帰つたんですよ。

で、2、3日したら〔連絡があつた〕。明るる日から、あの、聞かへんかつた人がね、耳を傾けるようになって、憑きが取れたみたいになつたらしいんやね。で、お義母（かあ）さんの四十九日のあとのお祓い（あれ）を、「成仏さすためにするから」いうて言うたら、返事したらしいんやね、旦那（にいさん）が。

ほで、それするのに、お母さんの調子が悪うて、もう、えらい仕事はできな

くなつたンや。神さんを受けて、口ではしゃべっても、立って握ねてはね。自分の手足になる人、ほんまに神さん来た人を、つかまえな。ほんとの神さん来た人やないと、自分が信用なくなるし。神さんも、でたらめな人きてやなあ、へんなことされたら、困るから。ほで、大阪のお寺の住職（おじゅっさん）に、「[わたしは] 神さんが来たら、こうやああや言うだけで。神さん受けて、こないすることはでけへんから、わたしの代わりにして [くれる人]」いうことで、探してもろうて。白羽の矢を立ったンが、大阪におる、あの H のお婆さん。あのとき、ちょうど、61 歳のときやね。この人の姑（おばあさん）のドンドコするのに、はじめて、そうめん滝で会うたんです。

初対面で、挨拶して。母親はもう、ああやこうや言う人とちがうから、黙って、「よろしくお願ひします」いうことで挨拶して。お母さんは、パッと見たらもう [わかるの]。神さんが乗ったらもう、お母さんの目え、あれすることできないンよ。もう、こないして見たら、そのオーラに押されて、どんな人でもダメなんよ。神さんが乗り移ったらね。もう、瞬きもせえへんよ。ジツとこうして、人相、観て。その人の後ろ、何が [ついてるか]、どんな人かいうこと、わかるから。ほで、「わたしはちょっと、身体の調子、悪いから。きょうはこの大きな仕事、お願ひします」いうて。ほんだら、「お母さん、あの人はじめてやけど、どんなン？」いうたら、「黙っとけ。ほんまの神さんが来たか来（け）えへんかはな、わかる」いうて。ほんで、住職（おじゅっさん）2 人呼んで、このお婆さん 1 人、ほんでドンドコするのに……。まあ、これは聞いてくもンですよ。ウソとちがうから。ほんまのことやから<sup>5</sup>。

お母さんがね、ドンドコして。笹をパッと持たして。「わたしがしたみたい、あの人に笹持たしてみる」いうて、私に耳打ちしてくれて。[神さんが] ほんまに来たら、その笹でわかるんよ。ほんだら、あの人も、お寺の本堂（あそこ）で、畳の、広いとこで。真ん中にバーンと、ご本尊さんの前にガッと座って、こないして。もう、あらゆる神さん、ぜんぶ呼ぶでしよう。お母さんも座って。太鼓も叩くし、鉦も鳴らすし。

なかなか、この人も、神さんが降りてけえへんのよね。ちょっと長あいこと拝んだら、お母さんがしたみたいに、パーッと立ち上がって。ご本尊さん行って、その笹で挨拶して。外へ出て、東西南北、そこの神さんやらもうみな挨拶して。ほで、入ってきて、「きょうは、お願ひします」と。ほで、神さんの指示で、霊を連れてきたり連れて行ったりする閻魔さんと呼んで。で、「お願ひします」と、座って。

ほで、こないして、叩いてしてもなんぼしても、お婆さん、立ち上がらんと、お尻で動きまわるんよ。お尻がもう、餅でな、ひつついたみたいに、お尻が立ち上がらへん。お母さんが「どういことやあ。こんな人がおるんかあ！」いうて。もう韓国語でパーッと。[お婆さんの] 口から、「おります。おりますからな、あの、立たしてください」いうて言うたら、パッと立ち上がったんや。にいさんがそうや、いうことやねん。社長が、下半身不随でしよう。ぜんぜん動かへんから、腰（こっ）から下は。そのシルシや。ほで、お母さんが私に

<sup>5</sup> この「まあ、これは聞いてくもンですよ。ウソとちがうから。ほんまのことやから」という発語は、いわば部外者である福岡安則と黒坂愛衣にむかって発せられたものである。

こっそりと、あとでね、「あの、ほんまに神さん来た人や。昔のわたしと一緒にや。でもな、わたしよりは〔格が〕下や」いうて。

あつ、ちょっと〔話が〕飛びました。あの、服、おカネな。「あつたら、知らせえ」いうて。明るる日、私に連絡あつたんです、電話で。「ちょっと、ともちゃん。あんた、お母さんとこへ連絡してえ」「なんでえ?」「おカネ、あつた」いうて。〔汚いから〕あかんいうて〔袋へ〕包んどつた、〔姑の〕好きやつたチョゴリ(あれ)の袖のここに、おカネが60万入つとつた、と。ほで、信用せえへんかつた旦那(にいさん)も信用したんや。ことあるごとに、言われたことしたら、もう、そのとおりになるから。

そやから、車椅子でもね、ドンドコのとこ来とつたんよ。きょうだい、みな来たけどね。ほいで、そのドンドコで、姑(おばあさん)が出て来て。話を聞いたたら、「ほんまはな、おまえの顔を見て、おまえの声を聞くまで、死なんと待つとつたんや」。病院で寝ずに世話してた娘や息子らが〔言うのには〕、医者(せんせい)が「もう、あきません」言うの、2回も3回もあつたんやけど。そのとき〔ねえさんは〕北朝鮮行って、帰つてこんのや。〔病院では〕「この人、おかしいなあ」いうて。はっきり言うたら、「もうあかんのに、なんでこないして、逝かんとおるんや」いうて。ほで、〔ねえさんが〕帰つてきて。〔姑が〕危ないというの聞い、行つたんですよ、病院へ。ほんだらね、娘がいままで寝ずにおつて。「ああ、義姉(ねえ)さん、来たつた。安心やわ。ちょっと帰るから。ねえさん、頼むなあ」いうて、娘が帰つたときに、「お義母(かあ)さん」いうて言うたら、ジーツと顔見て。それこそ、ほんまに眠るがごとく〔息を引き取つた〕。ねえさん、ひとりおるとき、こと切れたらしいんやね。長男の嫁を待ってて死んだ。だからその、親孝行した嫁なんやね。——それでまあ、わかつたからね、よかつた。それでその姑(おばあさん)のことを、いろいろお祀りして、済んで。

ほで、〔姑のをした〕何ヵ月かあとに、こんどその、奥さんの弟さんの〔番や〕。里の家がね、もう全滅してもうたんや、北朝鮮で。親もみんな死んで。そんで、弟が、ものすごいかわいそうな死に方したいいうて。供養(あれ)したらなあかん、いうて。ほんだらな、弟が出てきて、「姉さん、ごめん。自分が姉さんについて来たんや」。自分が、北朝鮮で見て、聞いて、したことを、みな、そのとき言うてくれとう。ほだからその、会社の社長さん夫婦も、みんなね、もう、うちのお母さんのことは信用してる。

### 息子の命が救われる

だから、いまだにね、「そんな偉大なお母さんの跡を、なんで誰も継がへんのや。あんたも、神〔受ける〕素質(あれ)がないんか?」いうて、よう言われ〔ます〕。これにも訳があるんです。巫堂(ムダン)いうたら、昔、あれですやん、もう下(げ)の下(げ)ですやん。下(げ)の下(げ)で、神さんをまともに受けた子どもらはな、苦勞するんです。神さんが来たからいうてね、金持ちなつたり幸せになるとはかぎらない。

私が言うたんです、「他人(ひと)の当ててな、なんで〔私らを〕金持ちにしてくれへんの?」いうたら、「アホか」。神さんはな、生きる人を助ける。霊がついたらな、その人の霊をな〔どけてやる〕。「お願いします。この悪い人〔の霊〕を連れて行ってください。どけてください」。〔でも〕観て、この人はなん

ぼしても死ぬ人やなあいうたらね、「ドンドコしたいんです」いうて拝みに来て、日にちを延ばす。霊を取り払（はろ）うてやって助かる人は、即、行ってね、拝んでやるンよ。でもね、この人はもうあかんいう人は、神さんが「これはあかんからな、助かる言うなよ。[ただし] あかん言うたらあかん。そのかわり、日にちを長いに延ばせえ。そのあいだに亡くなる」。——それ、[私に] みな言うてくれるんや、お母さんが。

だからね、[私らを金持ちにはしてくれなくても] 危険やあいうことは、察知して教えてくれる。私らでも、それ何回もありました。

[私の] 長男でも、そうや。7つのとき、急に朝早う電話があつて、母（おばあさん）が「[おまえの長男の] S が、どうも事故に遭いそうみたいなんや。そこの三叉路のところで、土地の神さんにお祈りして、大きいことはちっさいに、ちっさいことはなくなるように、晩に行つて、ちょっと拝まなあかんわいうて、神棚（メンダン）のハンメが言うてくれた。早よ、行ってやれ、言いようわ」いうて言うから、「ほんなら、お母ちゃん、来て」いうて。ほんで、夫（おとうちゃん）に言うたら、「うん、来てもらえ」いうて。

ほんで、「果物（くだもん）と、お不動さんに供物（あれ）するお餅と、一皿ずつ置いて。外へお供えするやつは、酒とナムル3種類、ちょっとだけして、それだけ置いとけ」いうて。夕方暗なる前に母親（おばあさん）来て、ものすごい長いこと拝みよん聞いたら、あらゆる神さん呼びよつたもん。朝鮮の故郷の神さん、鎮守さん、お稲荷さん、戎（えべつ）さん、もろもろの神さん、天の神さんはもちろん、山の神さん、そうめん滝の神さん、チリテチャングンいう土地の大將軍、うちこの神さん、みな呼んで、「どうか、中村家の長男をお守りください。子どもやから、自転車乗つて行つたり来たりしようけど、どうかお守りください」。1時間ほど、そこで拝んだ。ここの土地の神さんがな、「初めてや」言いようわけ。「こんだけ拝んで、自分らにふるもうてくれたんは初めてや。助けるから心配すな。でも、びっくりするやろ」と。そこで[母親が]「大丈夫やと思う。こんだけ拝んどうし、ここの神さんがわしらが守つたる言うてくれとうから大丈夫やと思うけど、びっくりすることがあるで」いうて帰つた。

明るる日や。S、帰つてきたんや、学校から。帰つてきたら鞆、バーンと放つて、自転車乗つて、[近所の] T くんどこ行つて、一緒に[遊びに] 行くや。ほんなら、夫（なかむら）は、「おう、S、帰つて来たんか？ どっか出て行つたんか？」「なんか知らんけど、いま出て行つた」。[私から] 100 円もろうて、いま S が出たのに、そこの角っこ、「事故や！」いうて、みながウワーツと行きよんや。びっくりして、夫（おとうちゃん）も私も、裸足で飛んで[行つて]、「どないしたん！」つて言うたら、もう、ガチャーンとやつとンやんか。大きなトラックが止まっとう。撥ねられたいうて、自転車倒れとんや。ほんで、救急車が、ちょっと間したら、来たんや。トラックが、T くんが渡る寸前に、[自転車の] うしろへ、やつてもうた。ほいでも、よかつたんや。かすり傷だけやつて。S はどないもなかつた。フワーツともう、全身の力が抜けた。ほんで、夫（おとうちゃん）と帰つて、「このことやつたんやな」いうて。

### 水難事故死を言い当てる

だからね、ウソとは思われないんや。私の母は、えらい、ほんまの神さんが

来てた。ほいで、このHのおばさんが、〔ドンドコ〕終わって、私の母親の家へ、帰りしなに来たんですよ。おばさんが、「おかあさんの家へ一回、神さんに挨拶したい」いうたから。挨拶したい訳があったわけや。お母さんが普通の人とちがうこと、わかったらしいんやね。ほんで、どんなどこかあ思っつて、来たんやね。

玄関入ったらね、3畳の部屋があつて。そこに、1畳ほどの、神さんを祀つてる〔神棚がある〕。玄関パツと入つて、戸を開けたらすぐ、その神棚が見える。お母さんは、「上がつてくださあい」いうて、パツと神棚、戸を開けて。〔おばさんは〕すぐに上がらんと、こないして〔神棚を〕ジツと見てね。「このメンシンは、昔、しゃべったんちがうか」。はじめて聞きました、他人から、そない言うの。お母さんは黙つて、「まあ、上がつてください」。「このメンシンは、昔、もの言うたなあ」。

ほんまに、もの言うたからな。〔メンシン姉さんが〕最初来たときに、私も聞いてる。「ただいまあ」いうて帰つてきたら、造花が、ピヨピヨピヨピヨ、ピヨピヨいうてね、もう、雀の鳴声（あれ）みたいに、しゃべるんよね。「ふくちゃん、ふくちゃん。おかえり、おかえり」いうて。ものすごい評判やつたんです、大阪で。「もの言う神さんがおる」と。

ほで、それからだいぶしてから、私が「どないして当てるん？ ぜんぜん知らん人が来て、その家のこと、この人が危ないとか病氣やとか、この人がどうやこうや、どないして当てるん？」いうたら、「メンシンが行くんや」。座つて千里、立つて万里。運勢〔を〕観〔てもらい〕に来たらね、「すぐ、そこの家へ行くん」いうて。神さんが「行つて調べてこお」言うらしいんや。ほな、光のごとく、そこへ行つて、鎮守の神さんにメンシンが挨拶をして。ほで、その家のことを聞いてくる、いうた。

〔あるとき〕調子の悪い子を観〔てもらい〕にな、〔ある夫婦が来た〕。「あそこ行つたらな、よう観る人がおるで。そこ行つてみ」言われて来たんや。病院行つてもな、大した病氣ちがうのに、ずっと熱が出たりしてな、調子悪いからな。まあ、お祓いかおまじないでもしてもらおう思つて聞きに来たんや。ほんだら、その子〔の名前と生年月日を〕入れたら、その下か上か、弟か兄か知らんけどな、もう1人の、元気シャンシャンの子、「この子な、水難に遭うから気つけよ」言うたんや。ほんだらな、「ウソや」いうて怒つて帰つたんや。「こんなもん、神さんもへつたくれも来てへん」いうて。その子、水難に遭つて死んでもうた。

それをな、その人がな、ほんまに受けて、〔ドンドコ〕したら助かつつたかは知らんで。でもな、母親（おばあさん）は、帰つたあと、「この子はな、寿命短い」言いよつた。母親（おばあさん）わかつとつたらしいわ。「あの子、危ないで。これは親の前では言われへんけどな、危ないで」いうて。水難で死ぬいう相が出とつたんや。そやから、まじないを言うてやつても、お祓いしてもな、あかんから、その人が怒つて帰つたんやんか。怒つて帰るように仕向けてんや、神さんが。なんでいうたら、もし〔ドンドコ〕して、死んでもうてみ。どないするん？ だからもう、観てもらいに来たとき、「この子は危ないから、ほどほどにせえ」いうことやつたんちがう？ そやからな、「ウソや。こんなもん、信じるもへつたくれもあるか」いうて、心で思つて帰つたんや。

ほんまに神さんが来たんは、お母さんだけや。私（おばあちゃん）らがよう知



つともん。

### 死出の旅路も自分で指図

そうや、いま思い出した。お母さん、〔神棚の〕真ん中に祀ってるのは、これぐらいの観世音菩薩。観世音菩薩いうたら、病気なったりしたら助ける神さんなんやて。「お母さん、これはなんで祀っとん？」いうたらな、「観世音菩薩いうてな、生きとる人間を助ける人やでえ」いうて、よく言われた。

お母さんはもう、ことあるごとにねえ、私らに「おまえら、よう聞いとけよ」と。「お母さん。お母さんのあと、だれもならへんの？」「ぜったいならせへん。巫堂（ムダン）の子や、言われるんや。わしは、それが嫌や」と。巫堂（ムダン）いうたら、下の下やから。「この巫堂（ムダン）という言葉はな、わしの代で終わらす。子どもにな、そういうの、背負わしたくない」と<sup>6</sup>。

ほで、「〔神棚は〕わしが死んだあとに潰したら、意味がない。その神さんがだれかに移る。だからな、これ、よう聞いとってくれえ」いうて。「わしがな、どないして死ぬんやわからへん。言葉しゃべらへんようになってな、寝込むかわかれへんから、言えるときに言うとか。これは、娘のおまえらがせえへんかったら、でけへんことや。兄ちゃんがおっても、嫁さんがおっても、どんなことがあっても、私の遺言やゆうてな、してくれよ」と。「おまえら、娘に言うとか」いうて。

「わたしが死ぬ前に、起きられへんなって、医者が診てもうあかんあ思うたら、神棚を片づけてくれ」と。「わたしが生きとつてもええから。仮に生き返ったら、わたしの身体で神さん受けるから。その神棚をな、わたしの息のあるうちに〔処分しなさい〕。観世音菩薩は、そうめん滝のお寺へ持って行って、奉納して。ほで、このもろもろのやつ、ぜんぶな、燃やしてな、この神棚を、みな、なくせえ」いうて。

母親、ほんまに、自分の亡くなるときの服の着せ方、亡くなった後のこと、寝とうときに、ぜんぶ、私らに言うてくれたんですよ。

ほで、お棺の上に、自分が金毘羅山行ったときに、えらいさんの住職（おじゅっさん）にもらった、金粉みたあな墨（あれ）で、五重の塔みたいに描いたやつ。いちばん上が観音さんやね。それが五重の塔で、降りてきた神さんが、ずうっとおる。お経をぜんぶ、書いてあるやつ。それを貰ってきたらしいんや。「わたしを〔お棺に〕入れたら、最後に、それ、テダナイを、わしが息引きとる直前に〔垂らしてくれ〕。泣くなよお。『お母さん、お母さん』いうて、泣いて呼んだら、わしは天へスツと行かれへん。泣かんと。おまえらしか、でけへんことや」いうて。私と姉が2人〔そばに〕付いてたから。ほで、姉がまた、もひとつ賢いねん。姉のほうは、靈感があるぐらい賢いんです。お母さんの気性を引いてるし。もう、お母さんの気性（あれ）とまったく一緒やから。姉が、「ふくちゃん、よう聞いとけよ。わたしも忘れるから」いうて。

<sup>6</sup> 崔吉城も「ムダンという名称は蔑称であり、巫に直接呼びかける時には用いられない」（崔 1981=1984: 141）と述べている。また、崔吉城によれば、巫堂には「世襲によるものと神懸かりして巫になる降神巫がいる」（崔 1981=1984: 141）。そして、全羅道は世襲、ソウル地方は神懸かりとの調査結果を述べているが、本稿の語り手の母親の出身地の慶尚道については、残念ながら言及がない。

「息引きとるいうときに、みな、ワァーッいうて、泣くなよお。わたしを寝さしといたら、頭の上に鴨居が〔ある〕。息引きとる寸前にな、〔テダナイを〕垂らしてくれ。ほいでな、「服は、おまえが着せる」いうて、上の姉に。ほで、みんな、たいがい、最後のウンチするために、オシメしとうでしょう。「それはな、服を着せたあと、最後に、お棺に入れる前に、こっそりと、だれにも見られんように屏風して、それを取ってくれ。パンツだけにしてくれ。その汚いやつは取ってくれ」と。「取るときに、ひょっとして、手につくかわかれへん。ついたら、どんなことしても、その臭いは消えへんど」と。「それを消せる方法がある。ついたときには、黙っとって。親が死んだとき、着せるとき、『お母さん、きれいにしよ。みんなが来るから、きれいにしよ』言わなあかんで」と。「なんかちよっと、ああやこうや口に出ると、なんぼでも出すから。そんなん、いっさい言うなよ」と。『きれいにしよ』言うたらな、きれいにするから。〔汚れも〕ひくから。言うたら、なんぼでも、シルシを出すから。するなよ」と。

そんでまあ、最後にね。お棺が来て、「入れますう」いうたときに。家でしたからね。屏風をして。もう、三重に着せてるんです。いちばん上は、きれいなブルーのチマチョゴリ。その中には、白のピーダンいうて、最高のチマチョゴリ。その下にまたチマチョゴリ着せて、してるんですよ。それがねえ、お母さんが、自分でみな〔用意〕したんです。ほで、この手が見えへんように、白い絹〔糸〕でターツと縫って。ほいで、靴下は7足、タオル7足。みな、自分で入れて。ほいで、あの世のおカネも入れて。みんな、してあったの。出してみたら、もう、そのとおりの。「これを着せるのは、すえちゃんやでえ」いうて。ほんで、おしめ取って。ほで、お棺に入れた。ほだ、こっそりと、「ふくちゃん。手に臭いがついて、消えへん。どないしよう」いうて。「姉ちゃん。お母さんが亡くなる前に、こないこない言いよったやん。してみたら?」「ああ、そうや」。ほんで、「水、持ってきてい」いうさかい、黙って、水持って来て。ほで、屏風しといて、頭の上にパーンと置いて。「お母さん、お母さん」いうて、3回呼んで。「お母さん、手に臭いがついたんや。大勢のひとが、お母さん、見に来るから。この臭いを消してえ」。そないして言えいうて、教えられてたから。「とにかくな、きれいにしてえ」言うた。台所行って、手え洗うたらね、なんの臭いもせんや。きれいに。だからね、ほんとのことやいうことを知らしてるわけや。お母さんが死ぬ間際まで。

### 亡くなるときも不思議なことが

〔お母さんが〕明日死ぬいう、今日。お母さん、寝て、こないして、「おまえの顔が、二重にも三重にも見えるんやけど」いうて。姉ちゃんが「お母さん、目薬さしたろかあ」いうて、注したんやけども。もう目が、二重にも三重にも見える。ほで、ジョーツと見とうとこで、神棚（あれ）を持って〔行って処分したんです〕。〔造り〕花はみんな、土手のとこ行って、神さんお祈りして。お酒持って行って、そこの土地の神さん、もろもろの神さんに挨拶してな。「燃やせよお」いうて〔言われたとおりの〕、みんなそないして。

ほで、「観世音菩薩だけは、そうめん滝、納めえ」いうて言われてたから。で、それを持っていくのにね、やっぱり、母親が死んだら、〔後始末は〕娘が中心ですやん。ほで、上の姉が姫路におったから、そのときも来とって。「ち

よつと待つて。わたし、用事で〔うちへ〕行ってくる。すぐ来るからあ」いうて、昼過ぎに行ったんですよ。ほんだらね、なかなか来おへんねん。ほんでもう、〔そうめん滝へ〕持っていくために、おカネと果物(くだもん)とお酒、もうちゃんと用意して。ほんで、「お母さん。姫路の姉さんが来おへん」。そのときはもう、耳は聞こえても、〔応答は〕手えとか首振るだけやからな。「来えへんのやけど。どないしよう？」耳にあてて、私が言うたらな。私のほっぺた、バシッと、なでるんやね。もう力がないから。「どないしたん？ あかんのン？」いうたら、「あかん」。ほな、「あの〔Hの〕お婆さんと、姉ちゃんと、持っていつてもらおうかあ？」いうたら、「あかん」。「ほんだら、兄ちゃんのお嫁さんが行くン？」いうたら、「嫁さんに持って行かせえ」と。だから、観世音菩薩を抱いてお寺へ納めに行くのはな、長男の嫁が行くもんやいうこと。ほで、もう3時になってしまつて、慌てて〔そうめん滝へ納めに行った〕。

その晩、危篤。もう危ないいうことで、〔親族〕ぜんぶ集まつて。寝とつて、自分が逝くのにな、「お寺の方角から〔来るから〕、早う、玄関の戸を開けて、お供えして。みんなそろつて、挨拶せい」いうて。耳〔元〕で、「お母さん、だれが来るん？」いうたら、かぼそおい声でね、「お宮さんのほうから、真つ赤な袈裟をした、真つ白の馬に乗った人が、長あい棒みたいいなン持って、来よるから。早う、お酒やらもう、あるもんぜんぶ玄関にお供えして。おまえら、挨拶せえ」いう。「その人に付添いが、真つ黒な服着た人が、一緒について来ようから、挨拶せえよ」と。〔夜中の〕12時過ぎで、馬に乗った人が来た思うたらな、降りてきてな、お供えしとう酒をグーッと飲んで、「ハア、満足や」いうてな、帰つて行ったから、「早う〔お供えを〕ぜんぶ包んで、お寺さんへ持って行ってな、ほかしてこい。神さんに付いてきたもんが、みな、食べるから」。自分のその、死ぬまでの手続き(あれ)を、ぜんぶ自分でゆつて。私らは、言われることしか、ようせんもん。ほで、そないしとつて、明るる日、8時前かな〔息を引き取つた〕。

7時半ごろ、〔母が〕なんかもう、寝とうみたいにスヤスヤやから。私と姉が添い寝(あれ)して、横になつてた。ほんで、えらい静かやから、兄ちゃんが、「お母さん、よう寝とんなあ。ちょっと市場へ買物(かいもん)行つて、すぐ来るから」いうて、出て行ったんです。やっぱり、そういう母親を見て行つとうもんやから、もう、買物(かいもん)もそこそこ、8時すぎに「ただいまあ」いうて帰つてきたんやね。その「ただいま」いう前に、私が母親の脈をとつたら、ぜんぜん脈がないんやもん。「姉ちゃん。お母さん、脈ないでえ」いうたら、「ええー！」いうて。姉も、もうずっとやから、ちょっと〔ウトウト〕こないしとつた。〔そこに〕「ただいまあ」いうて、兄ちゃん入つて来たんや。ほな、「いやあ、兄ちゃん。お母ちゃんの脈がない」いうた。「姉ちゃん、どないしよう。早よ、お母ちゃんのテダナイ、あんた、掛けなあかん」。姉さんしか掛けんもん。「お母さんが逝きよるのにな、姉ちゃん、早よしいよお」言うとうあいだに、兄さんが〔母に〕水を飲ましたら、カクンカクン、飲んで。もう、それ、兄さん待つてたんよ。もう、脈がないの、逝きよつたんやけど、兄ちゃん来るのを待つてたんや。

ほいで、兄ちゃんが「おおい。ものすごい、牡丹雪が降りようど」と。「ええつ。お陽さん、あんだけ照つとんのにな？」太陽が昇つてきとんのにな、牡丹雪が、グワーッと降つて。あとで考えたら、母親を、あの世の神さんが連れ

て行くのに、あれしてみたいなんです。

ほいで、お棺に入れて。葬儀屋さんが来て。葬儀屋さんが、「ちょっと、金本さん。おばあちゃん、笑（わろ）うてるわあ」いうて言うから、みんながワァーッとね、お母さんを見たら、お母さんの顔が、にこーっと笑うてねえ。ほんまに、笑うた顔してね。葬儀屋さんが「びっくりした。わしは何十年、この〔仕事〕しとうけど。こんなきれいな、笑うとうおばあさん、はじめてやわあ」いうて言いましたわ。

ほいでね、亡くなる半年ほど前にね。私が〔母のとこへ〕遊びに行ったんですよ。「ふくちゃん。おまえは、わしについて、よう〔してくれた〕。ほんまに、神棚（メンダン）のハルメも、メンシン姉さんも、神さんもな、ほんまにありがとう言うてるわい。ふくちゃん、わしはこの世で立派な家はないけど、わし、あの世にもものすごい立派な家があるでえ」「ええっ、ほんまあ？」「うん。この世にない家。〔だれも〕見たことのない、いい家やでえ。わしの家は、あの世にあるでえ」「ほんまあ。お母さん、行ったン？」「うん、行ってきたあ」言うたんですよ。

そのあと、死ぬ5日か6日前に、母親がこない言うたんです。北朝鮮に〔私の〕4番目の姉が帰って、ものすごい苦労してる。〔母が〕「わしは、みさちゃんに会（お）うてきたでえ」いうんですよ。「会うてきたん？」「うん。わしはな、前、一回〔じっさいに〕行ったときは、おまえとはこれが今生の別れやいうて帰って来たけど。〔もう一回〕みさちゃんに会うてきたから」いうて、ちっちゃい声で言うからね。「ほんまあ？」「おまえらがな、なんぼ、きょうだい思いで、行こう思うても、なかなか、まだ行かれへん。わしが死んで、3年目なったらな、自然と、行くようになるから。〔それまでは〕どんなにあがいても、おまえら、きょうだい助けたいいう気持ちは、実らん。3年経ったら、自然と行けるようになるから。それまで待つてえ」いうた。ほんまに、お母さんの喪が明けた3年目に、自然に行けるようになったんです。神戸から船が出るようになって。きょうだいで、助けに行ったんですよ。もう地獄の暮らし、しとうからね。ほんまに、それもねえ、みんな、きょうだいで話すことや。「お母さんが3年目え言うたン、ほんま。お母さんの、3年、喪が明けたときやねえ」いうたもん。言われたとおり、行ってきました。

#### 四十九日に姉が見た不思議な夢

2番目の姉（おばちゃん）、母親（おばあさん）が亡くなって四十九日に不思議な夢を見たんや。「母親（おばあさん）がな、わしはあの世に家がある言うたことな、ふくちゃん、ほんまやで」いうて言うんや。「なんで？」「なんとも言われへん夢見たんや」いうて。「何の夢？」「いつもな、おまえと一緒に赤いボルボ乗って福山へな、店行くやろ？」「うん」「わしを、いつも朝迎えに来るやろ？そのときな、朝な、おまえが来るまで、その夢見とったんや」。なかなか姉ちゃんが出てけえへんねや、迎えに行ったら。福山〔にある私が経営しとう弁当〕の店行くのに。でな、タッタッと〔家に〕入りかけたら、出て来よった。「いつも姉ちゃん〔が〕待つとうのに、〔きょうは〕なんで遅いン？」いうたら、「おまえが来るまで、ちょっと横になつとつてな、不思議な夢見たんや」「何の夢？」「おまえと一緒に〔車に〕乗って、さあ福山行こかいうて、バーッと行きよつたらな、曲がり角曲がつたらな、『あそこがな、お父さんとお母さん

の墓やで』いうて、いつも見て行くやろ」いうて、夢うつつでそない言うわけや。「これな、いま乗って、おまえに言うわな」いうて。行きしな、その話をした。運転しもって。

「いつも曲がってグーッと行くところ、左側見たらな、お父さんの実家(さと)の墓があんねン。ところがな、曲がって行きよったらな、お父さんの墓が見えへんのかや」いうて。ほんでな、「ふくちゃん」「姉ちゃん、なに?」「ちょっと止まってみ。あっちのほう、お父さんの墓がな、見えたのに、墓が見えへんとな、人がおるわ。なんでやろ? ちょっと降りて行ってみるわ」いうて、姉ちゃんがダッダッと走って行ったんやて。走って行ったらな、墓の前でな、お坊さんが立っとんやて。ほいで、そこに人が何人かおってな、その墓をな、レッカー車でいまでも吊り上げてな、撤去しようみたいなんや。ほいでな、お坊さんがお経あげとってな、しとうさかいな、「何しとってンですか? おたくら。これ、わたしの親の墓です」言うたんやて。ほんだらな、「ああ、このお墓の子どもさんですか? この持ち主をな、なんぼ探しても探してもわかれへんから、もう、日にちが来て、あかんから、魂を抜いて、お経をあげて、この墓をほかへ持って行くんです」「許可も得んと、そんなことしてもうたら困ります」いうたら、「これをな、なんやらいうお寺へ持って行かなあかん。間に合わへん。もう時間がないんや」。姉ちゃんがな、「もう、それやったらな、しょうがない」いうて。ほんでな、ごっついレッカー車はその墓石を積んで、行くんや。ふっと見たらな、真正面のむこう側な、ものすごい細い道しかないんやて。ほんでな、手合わせて、車がな、あそこないして入って行くんやろ思うてな、姉ちゃんがジーッと見とったんやて。ほんだら、お坊さんがお経あげよった思ったら、レッカー車がな、こまいなってな、そこ通り抜けた思うたら、一直線に天へ上がって行ったんやて。「ふくちゃん、[天へ]上がった途端に、その墓が、墓と違うんや。何やいうたらな、金の、ごっつい綺麗な五重の塔になったんや。ジーッと見とったらな、その五重の塔の扉がな、バタバタバタバッと開いた思ったらな、もう、なんともものすごい綺麗な羽衣を着て、天女みたいな人がな、7、8人、窓いう窓からな[姿を見せて]、丸坊主になったお母さんがな、真っ赤な袈裟着てな、そのなかへジーッと座ってな、わたしのほうへむかって手振ってな、ダーッとな、天へ昇って行ってもうたんや」。

「おまえ待とうあいだにな、ちょっと横になつとった思うたら、うつらうつらな、この夢見たんや」いうて。——この続き、まだあるんやで。ほんまの続きがあんねン。今度は夢じゃない続きが。

ほんで、それからな、四十九日済んで、まだ1年も経ってないんや。そうめん滝に、お母さんが神さん祀つとったン預けとったやろ。そこを切り開いたんは母親(おばあさん)やから、その御本尊さんの、山の神さん、水の神さん、そこらのもろもろの神さん、ぜんぶ、母親(おばあさん)、あれしとうからな。ほんでな、そのそうめん滝のお寺さんに、みなな、もう昔から、自分らの家のなんやかんや祀って置いとうさかい、もう、そこ、綺麗にしてな、御本尊だけにするいうて、いっさい、みな持ち帰れいうて連絡が来たんや。私(おばあちゃん)の実家(さと)に。兄がおるとこや。そんなことされたら困るやん。母親(おばあさん)が、「わしの神さんは、わしの生きとううちにそこへ持って行けよ」言うたから、その通りにして、そこへ祀られとうやん。ほんだら、兄ちゃん、びっくりして、「そんなもん、祀とう神さん持って帰れ言うたってな、困る」

いうて。そこの、そうめん滝のお寺を管理しとうおばあさんがおんねン。昔からずうっと。日本の人やで。で、そのお寺を切り開いたんは母親（おばあさん）いうこと知っとってンや。

ほいで、そのおばあさんがな、みんなに通達したその日の晩にな、すごい夢見たんやて。夢見てな、そこらの檀家の人にな、「祀っとう金本さんの、この御本尊さんだけはな、絶対にあかんで。この人〔の〕をなくしたら大変なことになるから、この人〔の〕はなくされへん」いうて言うたんやて。ほんだら、みな、「なんでや？」いうて。「いや、あかん。この御本尊さんをなくしたらな、大変なことになる。この人〔の〕だけはあかん！」ってな、おばあさんがすごい反対した。

ほんでな、兄ちゃんがな、自分とこのお母さんのな、あれした神さんだけは置いてもらわな思うて、行ったんや。「いや、じつはな、こないこないで。あんたとこのお母さんの夢見てな、あんたとこのお母さんの神さんだけはな、外されへん」いうて言うてくれたんやて。

ほんで、何ヵ月かして、大々的に、神さんがみんな綺麗になって帰ってきたから、そこ、大祭りや。そのお寺さんの。ほいで、大祭りするのに、みんな、寄付もごっついやって。〔弟の〕たかしも兄ちゃんも寄付して、私らもみなな、行ったんや。ほしたらな、いままでなかったのにな、御本尊さんの下に金の五重の塔を祀っとう。ほいで、真ん中の姉ちゃんと2人で、「えー、お母さん、あの世に家があるというのは、あの世に金の五重の塔の家があるというシルシを見してくれたんやな」と。

そのお寺をな、切り開いたんは、母親（おばあちゃん）が最初。もう、朝鮮〔人〕の信者がいっぱい集まって来たんや。母親（おばあさん）の口伝てで。ほいで、寄付集めて、綺麗に。〔もともと〕廃寺みたいなやったんや。空襲で大阪から姫路へ疎開に来て、どこに何があるか知らんのにな、私の兄がまだ〔中〕学校行きようときに、「きょうはちよっと、わし乗してくれ」いうて言うからな、「おかあ、どこ行くんや？」いうて言うたんやて。「祀っとうハンメがな、行こう言いよるわ。わしもどこ行くんかわからんけど、とにかく乗れいうて言うさかい……」兄ちゃんが中学生のときに、〔自転車の〕後ろに乗って。わけもわからん田舎道のな、ほんまに、いまでこそ発展しとうけど、昔の、暗い暗い、けもの道みたいなどこな。「どこ行くんや？」「あそこ曲がれ、言いよう」とかいうて、神さんが言うてくれるらしいんや。「ここ曲がれ」いうてな。「そんなもン、どこ行くんや。おかあ、怖いわ」いうて。もう、田んぼ田んぼで、家も何にもない、田舎道行くんやから。

ほいでな、ダーッと行ってな、もう下は崖みたいなんあるし、水が流れる〔とこへ来たたら〕「ここや」いうて言うんや。ふと見たら、古ぼけたな、よれよれの、昔の〔お寺〕。それこそ、そんなとこへ。「ここ、生まれ言うんや」いうて。それが発端なんや。そこが、お母さんが信仰する場所やったんや、こっち来てからな。むこうおるときは、信貴山とかな、生駒山とか、そんな山の奥へ行って信仰しよったから。神さんを受けるために。ところが、こっちへ疎開で来たから、する場所がわからへんやん。ほな、「行こう」いうて教えてもうたんが、そこへ辿りついたんやて。

ほんで、〔自転車を〕下りたンやて。下りたら、もう、古ぼけたお寺さんや。ほんだら、母親（おばあさん）が下りた思うたら、神々にごっつい挨拶しよった

んやて。それが、そうめん滝。それが発端なんや。姫路へ来て、信仰するお寺、切り開いた。もう、それこそ廃寺になりよったお寺。落雷が落ちてな、雨が漏って、ほんまに、汚い汚いな、廃寺やったンや。ほんで、そこを、信者集めてな、再興（あれ）したんや。母親（おばあさん）が、いろんな知っとう信者おるやん。そういう人の口伝てで。——これはな、ほんまの話やからな。姫路市砥堀（とほり）〔にある〕東南寺。

**【文献】**

崔吉城，1981，『韓国巫堂』説話堂。（＝1984，福留範昭訳『韓国のシャーマン』国文社。）

## **“My Mother Was a *Mudang*”: Interview with an Old Female Korean Japanese (Part I)**

Sajik KIM, Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

This is an interview with a second-generation Korean resident woman in Japan whose mother was a *Mudang*, a traditional Korean shaman. In this interview, we are focusing on exploring “the world of shamans” seen from the view of a shaman’s daughter.

Sachiko Nakamura (anonym) was born in Osaka 1935 and, at the time of this interview, she is a Japanese citizen. Her mother was a famous *Mudang* who had many clients, not only from her hometown, also from remote towns far away. While her mother was conducting rituals, Sachiko often joined her mother’s rituals, babysitting her younger siblings, to observe the performances. As growing up, she had learned from her mother about the world of spirits which endowed her mother with shamanic abilities, the meaning of ritual processes, and the role of the *Mudang* standing between human beings and spirits. She also revealed that she herself had several mysterious experiences, such as hearing a voice from an artificial flower believed to be possessed by a spirit’s messenger and the warning from her mother predicting the traffic accident that Sachiko’s son could avoid. In this regard, Sachiko as well as her mother would be one of the people living the world of shamanism.

In this interview, from a shaman’s worldview, Sachiko is telling the life story of her mother who had lived as a determined *Mudang* to her dying day. While she was telling many mysterious stories, her storytelling was very convincing, and each episode was very vivid and clear as if it happened yesterday. According to her, shaman’s rituals do not mean to control the world in a human being’s favor, while it means listening to the spirits’ voices and attempting to remove causes of spirits’ rage to reduce hardships occurring in the human being’s world. Her story mixed with the knowledge and interpretations learned from her mother has a power to persuade listeners, whether they believe in the shamans’ world or not, to accept the fact that there are the people who live (or lived) in the world of shamanism. We may label her interview as an oral history of the *Mudang*’s world.

We are planning to report Sachiko’s own life story in the part 2 of this interview titled as “My Heart is Still Korean Even if I Changed My Citizenship to Japanese.”

**Key words:** Korean Japanese, *Mudang* (shaman), life story